

鶺鴒沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 1 1 3 号

続・颯田本真尼と本真寺	岡田 哲明	1
史跡めぐり 「本真寺見学記」	原 雅子	14
公民館まつりプロジェクトに参加して	守谷 俊博	17
「若尾山公園と若尾幾造」	小池 清志	18
わたしの鶺鴒沼の思い出 <1> 鶺鴒沼海岸のサーフィンの歩み	内藤 喜嗣	22
会員追悼		43
Coffee Break		46
日向薬師・宝城坊本堂 平成の大修理	竹内 広弥	48
『鶺鴒沼を巡る千一話』より 海岸平野の砂丘列	渡部 瞭	50
今井達夫遺稿 ① 『プレイボーイ』（前篇）	今井 達夫	54
活動の記録(平成28年4月～11月)		65
編集後記		68

『新編相模国風土記稿』（天保12年、1841）に、「鶺鴒沼村久久比奴末牟良」とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鶺鴒沼を語る会 発行

続・颯田本真尼と本真寺

岡田 哲明（会員）

本来ならば前稿の冒頭でお断りすべきであったが、本真尼について知りたいと思う方には、「藤吉慈海著『颯田本真尼の生涯』春秋社刊」を読まれることをお勧めする。本真尼、唯一の伝記とあっていい。藤沢市総合市民図書館、鵜沼公民館図書室に所蔵されている。

前稿につづき本稿でも、極力この本には書かれていない事項を掘り起こすことを主眼としているからである。

その後、新たに調査した事柄も多々あるので、続編を書くことにした。本稿は前稿の訂正や増補をも含むものである。

徳雲寺訪問の報告

筆者は前稿『鵜沼』112号を愛知県西尾市吉良吉田の徳雲寺（本真尼が実家の一隅に建てて貰った慈教庵がのち徳雲寺となる）檀家総代である颯田洪（さったひろし）氏に送付し、同寺を訪問したい旨をお知らせしておいたところ、ご承諾を得たので、2016年5月9日を約して現地に赴いた。

颯田洪氏とは名鉄蒲郡線吉良吉田駅で待ち合わせ、氏は車で徳雲寺と貞照院をご案内下さった。貞照院は本真尼が12歳で得度した寺で徳雲寺の北北西11kmほどのところにある。

颯田洪氏は今年81歳、本真尼の血縁であり、氏の夫人は明戒、正戒姉妹の親戚であるという。西尾市文化財保護委員長、吉良公史跡保存会会長を兼ねておられ、郷土史に非常に造詣が深い。

当日はあいにくの雨模様であったが、徳雲寺保管の本真尼や本真寺に関する資料を閲覧、写真撮影を済ませ、颯田家の家族関係など興味深い話題について、いろいろお話して下さった。

その後、碧南市霞浦町2-73貞照院にご案内頂き木村哲順住職を紹介下さったが、ここでも矢吹慶輝氏の書簡など貴重な資料を閲覧撮影できた。これらの写真は文末にまとめて掲載することとする。

颯田（さった）姓について

吉良町史編纂委員会編『吉良の人物史』には吉良吉田村の大地主、颯田甚右衛門、彌右衛門父子が元禄のころ新田開発に貢献した。また、同じ吉田村出身の儒学者薩埵（さった）元雌、徳軒父子は颯田杳右衛門家の人で、墓誌にその遠祖について「薩埵の文字を用い甲斐の国大菩薩峠より来るならん」と刻字されていると書かれている。吉良吉田には颯田、薩埵の両姓が存在し、両姓は同じ一族から別れたものと思われる。

また柴田鳳慧師（ペンネーム柴田六五郎）が書いた『まんだら和尚行状記』は本真尼の弟、颯田海雲の伝記だが、それには、「颯田家の過去帳と伝承によれば、颯田家は往昔大菩薩峠に住居した一族で地蔵大菩薩（菩薩はまた薩埵という）にちなんで薩埵と称していたが中古、遠州三方原に移住、さらに吉田の地に転じたものらしく（中略）いつの頃からか薩埵を颯田に、家紋も卍紋を石畳紋に改めたといわれる」と。また「颯田姓の由来については『本真尼伝』と大いに異なる。後日の考証を待たねばならない」と記述されているが、それは新宿中村屋を創業した相馬黒光の自伝『滴水録』からの引用との差異を指している。

『滴水録』の「本真尼のこと」という一章には「三河の国は仏教の篤い土地だときいていたが、本真尼の生まれた家の颯田が薩埵に通うのには、一つの面白い話が伝わっている。徳川家康は三河に生まれた、そしてまだ三河の狭い国内で他の名族と勢力を争っていた時分のことらしいが、夏の最中の戦いで勝ったか負けたか、とにかく喉が大変に乾いた。どこかに清水が湧いていないかと探したけれど、あいにく井戸も流れもなかった。そのとき家康は百姓に西瓜を貰って渴きをいやし、その百姓に褒美として薩埵という姓を与えた。その時代、百姓が領主から苗字を許されるのは余程の場合で、大変な名誉であった。けれども菩薩にひとしい薩埵など、そんな字はもったいなくてつけられなかった。それで別の颯田という字を当てた。本真尼が生まれたのはその颯田家で、何代目に当たるか、とにかく六人兄弟が六人とも出家したという信心深い家であった。」と書いている。

正説は前記と思われるが、西瓜の褒美説は話として面白い。

颯田本真尼の父母、兄弟姉妹

父は、颯田清左衛門（1827~1909/5/13）享年 83 歳

颯田家は吉良吉田の豪農の一家であり、その父を岩右衛門（1784~1864/5/13）という。それなりに裕福であり、屋敷も広く敷地の一隅に慈教庵（後の徳雲寺）

を本真尼のために建てた。仏心の深い人で「花が散る」といって亡くなった。
辞世に「八十年を三年重ねて見し夢も覚めて嬉しきみ仏の国」と詠んだ。

母は、じゅう（じう、または、じふ？）（1829~1875/1/21）享年 47 歳

この人も信心深く、胎教を重んじ、懐妊中三帰戒を受け 5 か月の間、仏前に百遍礼拝をした。12 人の生まれた子にはすべて三帰戒を受けさせた。

長女（りつ）颯田本真（1845/11/28~1928/8/8）享年 84 歳

12 歳で中山貞照院天然和上について得度し、父の妹本乗尼について修行、慈教庵（徳雲寺）鵠沼慈教庵（本真寺）を興す。94 名の弟子を育てる。全国の災害地に赴き布施を行い仏縁を作る。

長男（？）黒野浄円（1846.7~1892/6/17）享年 45,6 歳

吉田村萩原の豪農黒野家へ養子に入る。徳雲寺本堂建立（1883）に際し捨身世話をする。のち金融業に失敗し、得度して一行院（庵）に入りそこで病没する。妻は本真尼の弟子になった順誓尼である。息子は黒野耕斎（1878~1936）鵠沼本真寺建立の大工である。

次女（？）颯田諦真（1848/6/6~1924/11/25）享年 77 歳

姉の本真尼から「嫁には行くな、同じ苦勞するなら出家した方がいい、極楽行の道に専念できるから」と常々言われていた。18 歳のとき中山貞照院の天然和上について得度。岡崎市昌光律寺の志運和上の依頼で 1884 年に京都市右京区鳴滝泉谷 16 西寿寺に入る。当時、荒廃していた西寿寺を復旧興隆させた。終生、本真尼を補佐した。

次男（亀次郎）颯田海雲（1852/5/2~1917/12/2）享年 66 歳

16 歳のとき最厳律寺の円海につき剃髪仏門に入る。1887 年に豊田市松平志賀町玉泉寺第 16 代住職となる。まんだら図を街頭にかかげて説教をするスタイルで「まんだら和尚」と地元で慕われた。近くの高月院の戒定という尼が妊娠し、しかも還俗せず、男の素性も明かせないというのを聞き気の毒に思い思案の末、生まれる子が父無し子となるのは将来に障ると戒定尼を嫁にすることにした。戒律に生きる僧が破戒をしたのだから村での評判も落ち、本真尼の怒りを買って、徳雲寺の山門に「海雲は入門を許さず」と貼紙をされた。しかし剛毅な海雲は意に介さず今までと全く変わらぬ「まんだら布教」を続けたから、村人の信用はやがて元に戻したという。1917 年 11 月 29 日朝、九久平の街角で寺の行事のポスターを貼っていて倒れ、3 日後入寂した。

三男 角治郎（？～？）享年？歳

慈本尼（1807~1847、西尾市真珠院を再建）

慈本尼は本真尼 2 歳のとき遷化されているから直接の師ではないが、その教えは本乗尼が受継ぎ、本真尼に多大な影響を与えた。慈本尼は、父無し児として生れ 4 歳のとき母が自殺、8 歳の時、颯田家へ奉公に出され子守（本乗尼の守）をしていた 20 歳のとき亡母が夢に現れ「私はまだ成仏出来ていない。お前が出家して追善供養してくれれば成仏できよう」というので尼僧になった。わずか 41 歳で遷化されたが、その修行ぶりは尋常でなく、遂に徳川時代を通じて第一と称せられる尼僧となった。本真尼がおこなった 3 年不臥の行も、四国八十八カ所巡礼も、善光寺参詣も、すべて慈本尼に倣ったものである。

実英尼（西尾市瑞松庵）

3 年不臥の業を終えると実英尼について 2 年間、宗学と律学を学ぶ獅子吼觀定上人（1819~1899、1879 年から京都黒谷金戒光明寺法主）

本真尼 37 歳のとき、京都黒谷金戒光明寺法主獅子吼觀定上人について宗戒両脈を相承する。

戒幢和上（中山貞照院）

本真尼 41 歳のとき、戒幢和上について形同沙弥戒を受ける。

深見志運和上（1835~1893、岡崎・昌光律寺）

明治 18 年「慈無量講」を発足、明治 19 年には 150 人の生活困窮者を救済、講の加入者は 500 名を超えた。明治 24 年の濃尾震災には救済活動に従った。

杉山大運（1860~1944、岡崎・昌光律寺）

深見志運の後継者、明治 28 年の酒田震災、29 年の三陸震災に慈無量講で集めた金品を救済活動に当てた。本真尼死去の際、弔辞を読む。

福田行誠（1809~1888、増上寺法主、知恩院門主、浄土宗管長）

廃仏毀釈に諸宗と同盟会を結んで仏教擁護に奔走し、肉食妻帯許可にも反対した。自身は厳しく戒律を守った高僧

釋雲照（1827~1909、真言宗の僧侶）

雲照は戒律を重んじ厳守をした僧として知られる。明治 19 年、東京に目白僧園という戒律学校を開設。十善会と夫人正法会を創設した。

本真尼とは、尼の実弟、三宅善苗の師であることから交流が始まったようだ。本真尼と弟子 3 人は酒田大震災の救済に赴くに際して明治 28 年 5 月 6 日、雲照から菩薩戒を受けている。この受戒を機に正法夫人会との関係が出来た。

濃尾地震と庄内地震罹災者の救済

前号では明治29年の三陸地震での本真尼の行動を詳述したが明治24年に起った濃尾地震と明治27年に発生した庄内地震について記しておきたい。

濃尾地震は明治24年10月28日早朝に発生した。三河徳雲寺も浸水した洪水被害のあった翌年である。震源は岐阜県本巣市、根尾谷断層帯でM8.0の直下型地震である。尾張、美濃地方は震度6強、本真尼の住む三河でも震度5~6であった。死者7,273人、負傷者17,175人、全壊家屋142,177棟、半壊家屋80,324棟、10,000か所以上で土砂崩れが発生という大規模地震災害である。ちなみに神奈川県でも震度4~5だったという。

このとき、本真尼の布施行に協力した人として、釋雲照の十善会、岡崎・昌光律寺、深見志運和上の慈無量講、岐阜県羽島郡笠松町下新町42善光寺(旧・智曉庵)の庵主称円尼、が挙げられる。称円尼の智曉庵も全壊したが罹災者救済に奔走した。高潮洪水に遭遇した三河における本真尼と同じ気持であったのだろう。

称円尼と本真尼は同志法友となったのである。二人は自身が集めた施物と共に、雲照の十善会や志運が慈無量講の会員から集めた救援物資を直接罹災者に施与した。称円尼はこの時の死者追善のため後年、境内に釈迦如来銅像を建立した。

庄内地震は明治27年10月22日17時35分発生、震源は酒田市の中心部での直下型地震であった。地震の規模はM7.0ともM7.3ともいわれる。

被害は最上川河口付近が最もひどく船場町では市内の死者162人のうち70人が同町から出た。山形県下の被害は死者726人、負傷者8,403人、全壊家屋3,858戸、半壊家屋2,397戸、焼失家屋2,148戸、破損家屋7,863戸。丁度、夕食の支度時間であったことから方々から出火し市内の80%が焼失したという(ウィキペディア記載)が、焼失家屋の数字は12,148戸と思われる。別の資料では、当時庄内の戸数18,967戸のうち全壊3,157戸、全焼12,118戸、死者718人、負傷者808人とあるが、こちらは負傷者が一桁少なそうだ。いずれにしろ大変な災害であったことは間違いない。

明治28年5月に釋雲照から受戒をうけた本真尼は夫人正法会の代理として救援物資を携えて酒田へ向かった。石巻まで船をつかい、そこからは陸路で救援物資を山ほど荷車に積んで来たといわれている。それらは衣類27貫目、蚊帳50張、古着80貫目、50円分の手拭と風呂敷、『人の道』『軍事に関する観念』『本願和讃』など3,000部である。このとき、濃尾地震で一緒に救済活動に当たった法友、岐

阜笠松の称円尼（智暁庵主）も同行された。

同年 11 月～29 年 1 月にかけて再度訪問。衣類 440 貫目、『人の道』3,000 部である。このときの衣類は三河、尾張、東京、桑折、仙台、楯岡の有志から喜捨を受けたものであった。

酒田市南千日町 4-50 瑞相寺の境内に建つ慰霊碑「震火災横死者霊」の裏面に颯田本真、志智称円と二人の名が刻まれている。

これが縁となり本真尼は大正 10 年ころまで本間家を中心に酒田へ度々招かれ、多い年は年 7 回も訪れ、1 ヶ月滞在したこともあった。行けば行く先々で念仏結縁の法語を行ったから酒田には信者が多く、本真尼が入寂したとき酒田町全域に「三河の尼様の追弔会」と題したチラシが配られた。その内容は「酒田大震火災の折、幾度も救助品を持参し皆様をお慰め下された三河の国の颯田本真老尼は八十四歳を以て去る八月八日に亡くなられました。皆様とご因縁浅からざる此の尼様の為に御弔いをいたします」というものであった。市内浄徳寺の婦人会が中心となり老尼の分骨を受けて納めた舍利塔が同寺境内に建てられている。

震災前の慈教庵に関する記述二つ

岸田劉生著『岸田劉生全集 第 6 巻』

「岸田劉生日記 T10/ 1/ 3 付」

「八時半頃離床。丸山も来て、朝の雑煮を祝う。今日で三ヶ日が過ぎる。餅を又十たべたので腹がくちくちくなったので丸山と散歩に出て、斎藤の脇の道を通って、アマ寺の前に出た。アマ寺アマ寺とよく聞くがはじめて見た。その前を通って行ったら、小川があって白い小さな橋のある所へ出た。変に美しい処だ。鵜沼海岸の川の上流かなにかに、こんな処が鵜沼にあったのかと、その瞬間思ったが、よくみたら何事だ、それは例の白い橋白い橋というのの二つ目の橋で、いつも来ている処だが、只今来た道ははじめてで、そこから見るのははじめてだったのだ。印象というものは不思議なものだ。久し振りで海岸に行ったらタコなど上げていた。帰ってから静物にかかり二時頃仕事を終え丸山と蓼、麗子などと長与へ行く。椿は先に行っていた。雨は降ったり止んだりしていた。長与には久しぶりだ。九時頃辞して皆で帰る。帰りに一足で電車に乗り遅れて十何分雨の中で待ったので一寸蓼が叱られる。麗がすべって足駄の鼻緒を切ったので丸山が負ぶってくれた。十二時頃ねむりにつく。長与で少し酔った。」

高木和男著『鵠沼海岸百年の歴史』第二追補版

「尼寺の事」

尼寺の事は前刊にほとんど書かなかった。ただそれが、現在の位置でなく、震災前までは吉村邸の前の道を隔てたところにあつたことは書いて置いた。震災のときと、その前の大正十年の大台風で二度津波に襲われたことが動機となって、もっと奥地ということで堀川に移つたのではないかと思う。このとき本真尼は葉山峻の祖父（筆者注：葉山又兵衛）のところに来て、夢のお告げだから土地を寄進してくれと頼んだそうで、たつての願いに土地を分けたという。

尼寺は、明治三十六年（一九〇三）日清戦争戦病死者追悼のために、颯田本真尼という人によって建てられたものである。土地は三陸津波の救援活動で知つた細川侯爵夫人糸子さん（筆者注：誤認である。正しくは、細川活版所創設者 細川芳之助夫人「細川いと」。但し、細川侯爵家が本真尼の支援者であつたことは事実である）から提供されたものである。

颯田本真尼は一八四五年に愛知県吉良町吉田に生れ、一九二八年（昭三）八十四歳で亡くなられた方である。尼の一生は『布施の行者・颯田本真尼』（一九七〇年刊）という書名で藤吉慈海氏によって春秋社から出版されている。それほどに、徳の高い人であつたらしい。私などは仏心がないためか、そのような人とは知らずにいたが、一生の間、ほとんど休みなく各地の災害地の救恤に歩いていた人であるという。

このためか、震災前の尼寺はごく質素な寺であつたが、何となく僧侶の間に気品があつたし、土地の人たちの信用は厚かつた。

尼寺は浄土宗で、私は小学校の頃、夏に祖母に連れられてお参りして、尼さんから中将姫が蓮の糸で綴つたというマンダラの図の説明を聞いたことを覚えているが、しかし内容は何もわからなかつた。この説明をして下さつた尼さんが本真尼であつたのかもしれない。

尼寺が堀川へ移つてからは、ことに本真尼が亡くなられてからというもの、寺へはどうも行く気がしなくなつた。それでも、毎冬の寒行には数名の尼さんが毎夕、各戸を廻ってお経を唱えて行かれた。

前の尼寺は震災で完全に潰れたが、全員無事で、堀川の現在の場所へ移るための資金は、新宿中村屋の相馬愛蔵さんと夫人の黒光さんの援助が大きいという。

本真尼・徳雲寺・本真寺に関する文献資料の再録

前号発表後、新たに見つけた資料を加え、「図書・論文など」「新聞・雑誌など」「インターネット検索可能な資料」に分類したので再録する。

◆ 図書・論文など（ゴシック体は既収集）

谷山恵林 著 『明治以後に於ける仏教女性の社会事業ならびに社会教化概観』

黒野耕斎 筆 「本真尼来歴書」手書き資料

大島徹水 筆 「円明本真」（本真詳伝を書くべく収集した資料）明戒尼が石橋真誠に託した（颯田本真尼の生涯 p171）

大島徹水 筆 「開山本真老沙弥尼伝記」明戒尼から昭和 44,5 年ころに牧達雄（知恩院執事長）・達玄（草津市西方寺住職）父子が預かった。（まんだら和尚行状記 p125）上記と同一資料か

矢吹慶輝 著 『本真尼伝』草稿、吉田久一が筆写：淑徳大学所蔵？

吉水学園高等学校編『浄土宗尼僧史』 … 国立国会図書館デジタル閲覧可

土佐 軍太（若尾 肇）「尼寺さん」『湘南の空の下で 嗚呼！鵜沼』 私家版

以上は発行年不明

矢吹慶輝 著 『本真老尼』非売品 慈教庵発行 1935/4/25 両友堂森島印刷所

藤吉慈海 著 『布施行者 颯田本真尼』非売品 700 部 華頂文社 1951/1 刊

相馬黒光 著 『滴水録』（本真尼のこと p25～30）非売品 1956/2 刊 大日本印刷

吉田久一 著 『日本近代仏教社会史研究』1964 吉川弘文館

藤吉慈海 著 『布施の行者 颯田本真尼』春秋社 1970/8 刊

大橋俊雄 「本真尼と慈教庵」『わが住む里』22 号 藤沢中央図書館 1971/3/1 刊

柴田六五郎（鳳慧ほうえ）著 『まんだら和尚行状記』1971/12/8 南無山房

林 千代 「颯田本真」『社会事業に生きた女性たち』五味百合子編著 1973

ドメス出版

岸田劉生 「1921/1/3 日記」『岸田劉生全集 第 6 巻』1979/5 岩波書店

田中まさ子 「堀川の尼寺さん」『鵜沼』32 号 1986 鵜沼を語る会刊

富士 山 「鵜沼の尼さん」『鵜沼』33 号 1986 鵜沼を語る会刊

塩沢 務 「颯田本真尼と鵜沼慈教庵」『鵜沼』44 号 1988/9 鵜沼を語る会刊

高木和男 「尼寺の事」『鵜沼海岸百年の歴史』第二追補版 1989/8

藤吉慈海 著 『颯田本真尼の生涯』春秋社 1991/10 刊

若尾 肇 「鵜沼の思い出続・堀川の思い出」『鵜沼』67 号 1993 鵜沼を語る会刊

西尾市教育委員会：吉良町史編纂委員会編『吉良の人物史』2008/3

吉良町立吉田小学校道徳指導資料「日本のマザーテレサ颯田本真尼」2008/6/23

モラロジー研究所出版部編『歴史に学ぼう先人に学ぼう 第5集 慈愛と信念に生きた人』

2011/6「日本のマザーテレサ颯田本真尼」の項：安井克彦 著

本真寺編「浄土宗夢想山専修院 本真寺」2013/9/23 発行者 斎藤良典

◆ 雑誌・新聞など

中平文子ルポ「タイトル不詳」1913 夏ルポ 掲載誌不詳

三河時報「人の災厄苦難を身に代へて救ふ吉田の颯田本真老尼」12号

北越新報「七十年の生涯を慈悲善根に尽す老尼」1917/07/06付

中越新報「世にも奇特なる火事見舞客、奥村五百子の再来」1917/07/08付

大阪朝日新聞「老尼の特志、諸国を托鉢して」1918/02/21付

唐津日日新聞「難波地方から遥々と馬渡島罹災者慰問の為お土産持参で来た

老尼僧」1918/03/02付

神戸新聞「七十四歳の尼僧飄然と水害地を訪ふ」1918/11/19付

秋田新聞「風の如、魔の如惨禍を尋ねて仏心の慈悲行脚、灰色の袈裟衣をつけて

七十八歳の老尼本真」1922/03/29付

秋田魁新報「奇特な老尼五城目大火の罹災費寄付」1922/03/29付

新愛知「飯田の大火罹災者へ反物数百枚布団数千枚を寄贈」1923/03/31付

万朝報「藤沢の生仏、慈教庵の颯田本真尼」1924/07/27付

主婦の友「社会救済事業の先駆をなした老尼僧の生涯」婦人記者ルポ 1925/新年

特別号(いつも世に隠れて奉仕の為に盡した本真尼の八十年の生涯)

サンデー毎日「アンゼラスの鐘ひびく謎の切支丹島、仏教村に咲いた人情美談」

1935/07/28刊

女性仏教 第17巻 第6号 1972/6月号 タイトル執筆者未調査

サンデー毎日「アンゼラスの鐘ひびく謎の切支丹島、仏教村に咲いた人情美談」

1935/07/28刊

庄内日報社「郷土の先人・先覚88《颯田本真》」1988年10月 田村寛三 記

中日新聞「近代求道の一面：被災者に半生をささげた尼僧」2008/4/13 石上善応

中外日報「近代の肖像」シリーズ「颯田本真(1)(2)(3)」2010/9/2, 7, 9 今岡達夫

佐賀新聞「大火からの島の再起支えた恩人を法要」唐津市馬渡島 2012/10/15

三河新報「日本が生んだマザーテレサ：颯田本真尼 90回忌法要」2016/4/6

中日新聞「吉良出身の本真尼しのぶ：西尾徳雲寺で 90 回忌法要」2016/4/9
三河新報「颯田本真尼の遺徳しのぶ：吉良徳雲寺で 90 回忌法要」2016/4/10

◆ インターネット検索可能な資料

菅野眞慧「颯田本真尼を巡る旅」2011～2012(1)(2)(3)(4) 聖者光明会 HP
田中悠文「釋雲照律師と夫人正法会の被災地支援」『現代密教』23号 2012/3 刊
斎藤 真「漬物王国山形ブログ 漬物の梨屋：颯田本真尼」2012/7/22
坂上雅翁「颯田本真尼と矢吹慶輝にみる福祉思想と実践」『浄土宗の教えと福祉
実践』浄土宗総合研究所編 2012/5 ノンブル社刊
坂上雅翁「近代における尼僧の災害対応の背景」研究紀要 14 2013/03/31
「徳雲寺所蔵 颯田本真尼の新出資料」研究紀要 15 2014/03/31
関西国際大学機関リポジトリ刊
坂上雅翁「颯田本真尼の外護者について」印度学仏教学研究 63 巻 2014/3
植西武子「時を駆けた女性：颯田本真尼の偉業」聖者光明会 HP
鎌倉光明寺 浄土宗神奈川教区テレフォン法話「900 話」
渡部 瞭「鵜沼を巡る千一夜 155『慈教庵創建』」
// 「鵜沼を巡る千一夜 247 話『慈教庵移転』」

(おかだ てつあき)

前号正誤表

P6	上から 6 行目	蜂須賀公爵	→	侯爵
P7	下から 2 行目	谷倉	→	戸倉
P9	上から 7 行目	横田	→	廣田
P16	上から 6 行目	雪門	→	徹門
P23	下から 13 行目	黒田	→	黒野

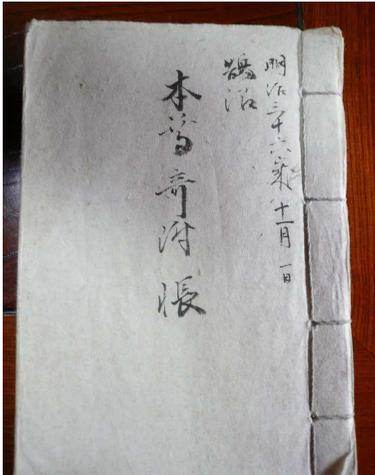
三河徳雲寺所蔵資料



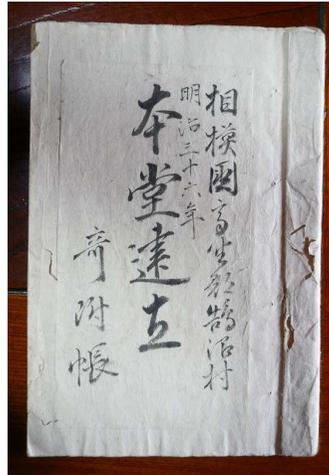
徳雲寺本堂正面



徳雲寺庭園



本尊布施帖



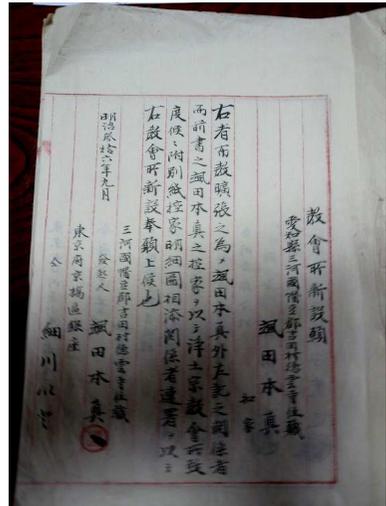
本堂建立布施帖



同、裏表紙



細川別邸と思われる建物



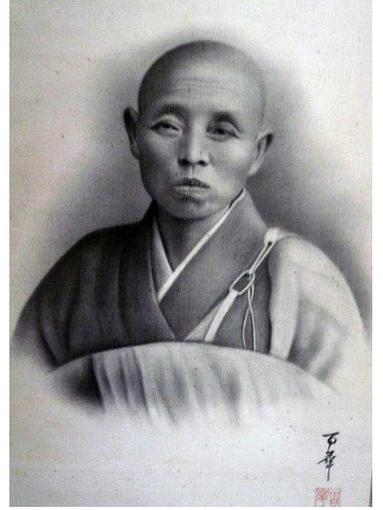
鶴沼教会所開設願



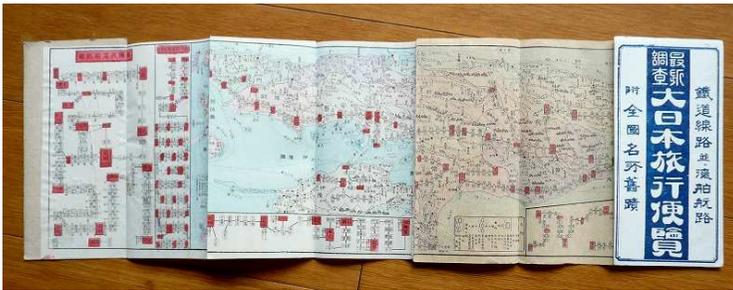
本真尼写真



本真尼肖像画 1



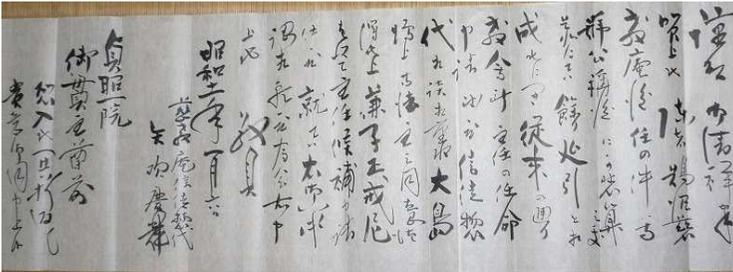
本真尼肖像画 2



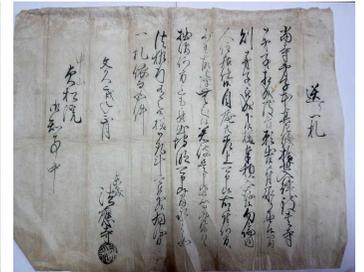
本真尼愛用の全国鉄道路線図



馬渡島観音堂



貞照院所蔵矢吹慶輝書簡



貞照院所蔵送り状



酒田浄徳寺舍利塔



酒田震災死者慰霊碑



本真尼筆跡

史跡めぐり 「本真寺見学記」

原 雅子（会員）

「颯田本真尼」の本真寺見学が6月21日（火）に行われた。あいにくの雨だったが、ようやくあの尼寺さんの見学ができるという期待に気持ちは弾んでいた。

浄土宗本真寺は小田急線本鵠沼駅から徒歩5分、線路際にある。通称尼寺さんと呼ばれる。

日本のマザーテレサと言われる三河の徳雲寺の颯田本真尼さんが明治時代に浄土宗教会所「慈教庵」を、信者であった細川いとりの別荘地、鵠沼下鰯に乞われて創設したが、その後、関東大震災で倒壊し、現在の場所に移った。

山門の脇には「不許葷酒肉入山門」と彫られた石柱がある、戒壇石という。生臭いものや酒や肉など仏道修行の妨げになるものは寺に持ち込まない覚悟をみる。震災前からのものがここに移設されているのだった。

かつて訪ねたときには境内だけでなく墓地でも滅多に人に会わない静寂な厳かさがあったが、この日は参加者の男性9名、女性5名、計14名のグループとして境内に入る。

当初、ご住職がご案内下さる予定が、突然の檀家の葬儀のため叶わなかったのが、急遽、岡田会員の先導で見学することになった。

ずっと尼寺だったのが、尼僧のなり手が無く平成10年からは男僧の齊藤良典師が住職に就任されているのだった。

参道の右側には、六地藏、震災で倒れた慈教庵の屋根瓦で作ったという水子供養塔、つづく右奥には青銅の屋根も美しい本堂がある。

本堂は広く、ご本尊の阿弥陀如来座像がある。ご本尊のお顔は岡崎の仏師、丹羽さん、胴体は京都の小泉氏の作という。お像自体の高さは90センチだが、台座と光背を入れると225センチの高さになる。明治36年の作品とある。平成18年に檀家その他の寄進により大修復がなされたが、10年たっているのに、今修復を終えたばかりのような艶やかな色彩である。

「うちもかなり寄進させていただいたんですよ」と見学に参加されたお檀家さんの女性が呟いた。その言葉に誘われるように、「こちらもさせていただきますよ」という男性もいた。

私は藤吉慈海師の著書『布施の行者 颯田本真尼の生涯』や網野菊の『海辺』、阿部昭の『子供の墓』などをあらかじめ読んでいた。

本真尼さんは幼い頃から信心深く長じて三河の庵主になった。北に異変があれば飛び出し南に災難があれば目的地にま



ご本尊 阿弥陀如来が安置されている本堂を見学

つすぐ歩きだす。今日でいうボランティアだが、地震や様々な災害時に救援物資を携え、率先して被災地に自ら出向き施しをされた。しかもそれを人知れず行った本真尼さんの慈愛に満ちた生涯を尊いと思った。

それは己を捨て他の人々のために救済と安寧をねがい、人々へのたゆみない愛情深い慈悲のおこないであった。そしてどのようなときでも、口称念仏をかかさず、人々の仏性を信じ成仏して浄土へ導く教えの現れであった。

慈教庵で本真尼さんは庵のお弟子たちと寄進された衣類や布団、手拭、古着などを洗濯し繕って救済品として備蓄されたという。現在の本堂や庫裡は本真尼さんがお亡くなりになってから建ったものだが、ふと、庫裡のどこかでお姿をお見受けするような気配を感じた。網野菊の『海辺』に描写された大尼の風貌が脳裏をかすめたのだろうか。

ご本尊の後ろに進むと薄暗い照明の中で祭壇の裏壁にはカトリック信者の長谷川路可画伯の描いた「出山の釈迦」の墨絵が現れた。かなり大きな板絵で、白い衣を風に靡かせサンダル履きの足で一心に歩む姿に圧倒されて眺めたが、釈迦とも、どこかキリストとも思わせる。

会員の中から、「これはお母さんの供養のために路可さんが描いたですよ」という声が出た。路可さんの実家も檀家であったのだ。

キリストも釈迦も愛と慈悲に満ちている。人の本願、他力ということでは宗教が違うといえども同じなのだろう。この絵は、路可さんが東洋と西洋の宗教者を

融合させたのかもしれないと感じた。画面の右下に「昭和二十五年七月十九日一心供養 路可筆」とある。

本堂の見学が終わったが、まだ雨は降り続いていた。各々傘を手に境内を回る。

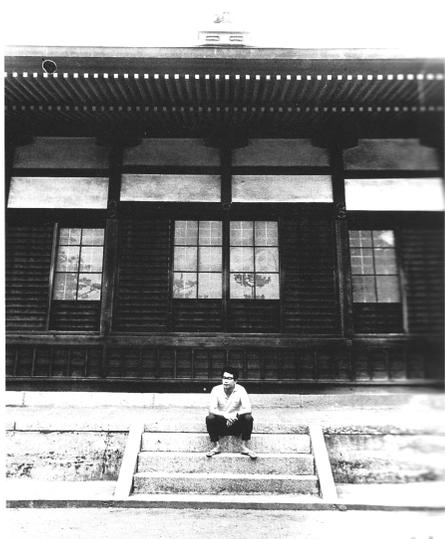
「三偕地藏尊」矢吹博士建立 昭和2年開眼 昭和50年再建

「薬師如来像」本堂の左側 平成3年建立

「阿育王塔」 大正6年細川氏寄贈

「伊藤将行碑」鵜沼海岸開拓者 大正9年

などが立ちならぶ。



本真寺本堂前の阿部昭（『阿部昭集』）

そのほかにも作家の阿部昭氏の墓があり、『子供の墓』という短編小説には主人公が一族の祀られている墓に3歳の子供を連れていき、子供が墓石に水をかけ続けるシーンがある。子を遊ばせる父親の感慨が描かれ、真夏の暑さと人気のない墓地の様子が印象深い。

他にも作曲家、俳優の越谷達之助氏（啄木の「初恋」の作曲）、忍節子氏（映画女優・東屋の長谷川欽一夫人）等のお墓がある。

雨はひとしきりひどくなって、お墓の見学は一部のみになった。今回改めて本真寺さんを訪れたが、さらに本真尼さんの思いが雨とともに、静かに胸に沁みた。南無阿弥陀仏。合掌。

（はら まさこ）

公民館まつりプロジェクトに参加して

守谷 俊博(会員)

今年の鵜沼地区公民館まつりは10月15-16日に開催された。鵜沼を語る会の展示テーマは「日本のマザーテレサは鵜沼にいた！」— 災害ボランティアの先がけ颯田本真尼。

日本のマザーテレサが鵜沼に・・・に関心を持って、本真尼とはどのような人だろうかと来場された方と、

鵜沼の尼寺さん「本真寺」のことを知っていて、その成り立ちを詳しく知りたいと展示資料を眺める方の両方がみられた。



颯田本真尼については昨年度の公民館まつりで鵜沼に居住した人々の中で、明治末に尼寺慈教庵(本真寺)創設の人として紹介されており、鵜沼の人達とは宗教拠点として寺と檀徒の関係で繋がりがあがる。また小田急線の電車から見える鵜沼の尼寺として認知されている方が多く、寺としては知っているが颯田本真尼が災害時に救援者として精力的に日本各地で活躍したことを識る人は稀である。

すでに本真尼が活動していた時から一世紀を跨ぐ時間が流れ人々の記憶の彼方へ忘却せしめられた尼僧の活躍を、岡田哲明会員が鵜沼地区を基軸に捉え、本真尼の出身地、三河の吉良吉田(現：愛知県西尾市)徳雲寺へ現地取材し、鵜沼慈教庵と移転した本真寺に係わる当時の設立文書・登記簿謄本類を写真やコピーで展示し、寺成立の歴史的考察をした内容は庵主すら知らぬことで、寺史を解き文書化・ビジュアル化したことは高く評価できると思う。

さて本題のマザーテレサ云々についてだが、本真尼の活動を時系列でみると、明治～大正期の災害史に連なり、仏教者として(当時、明治初期の廃仏毀釈で仏教が衰退、志ある仏教者は仏教再興を目指した時期である)奉仕と犠牲(S&S)の精神で喫緊の瀬に立たされた人々へ当座の衣類、寝具などの提供活動、即ち布施をすることであった。その布施物は日常托鉢で得た近郷からの寄付物や有力者からの喜捨である。本真尼がこれらを担いで被災地に向いた事実を展示し、我が鵜沼に「日本のマザーテレサ」がいた足跡を地域の人達に識って頂く機会となり、鵜沼の誇りを得たと思う。

(もりや としひろ)

『若尾山公園と若尾幾造』

小池 清志（会員）

皆さんがたは、藤沢市役所の後ろにある「若尾山公園」をご存知でしょうか。この公園は若尾幾造氏の名に因んだもので、若尾家の所有地は、現在の藤沢市役所庁舎域まで広がっていました。そこでこの稿では、若尾幾造とはいかなる人物かを調べてみました。



(1) 若尾逸平と若尾幾造

若尾逸平(1820～1913)は甲州財閥の草分けで甲斐国中巨摩郡出身。1859(安政6)年横浜開港と同時に、生糸などの貿易に従事した。明治10年頃生糸の買占めで巨額の利益を得た。若尾財閥形成者で、初代甲府市長。

若尾幾造(1829～1896)は若尾逸平の異母弟で中巨摩郡在家塚村(現山梨県南アルプス市)生まれ。兄逸平に誘われ横浜に出て、生糸・水晶・綿花・砂糖を商う。1876(明治9)年財産を兄弟で分け、生糸売込み問屋を兄から譲り受けて独立。1880(明治13)年横浜商法会議所が開設されて初代の定議員となった。1893(明治26)年横浜若尾銀行創立、同年藤沢支店開業。場所は今の新庁舎の辺りと考えられている。

(2) 若尾幾造は二人いた

①初代幾造(1829～1896)

若尾逸平の弟。1854(安政元年)年、25歳で、若干の資金でタバコの行商を始めた。

27歳の時25両を蓄えたが、タバコの値上がりを予想し、その25両を持って遠州(現静岡県)へ買い占めに行く途中、強風・強雨の大井川を渡ろうとして、資金の25両を川底に落としてしまった。(「甲斐出身名譽家列伝」による)

1859(安政6)年、横浜が開港されると、兄逸平の手伝いとして横浜に進出して、兄は主に甲州・信州や八王子周辺から生糸の仕入れを担当し、弟の幾造は横浜で主に外人への売り込みを担当した。

櫻田門外の変(1860年)が起こった頃のある日、生糸売り込みのため、外国人商館へ行ったところ、偶然にも水晶屑が高く売れているのを見て、大急ぎで甲州御岳(みたけ)の昇仙峡の奥にある金峰山麓から水晶の原石や屑を買い集め、半月の間に五回も甲府と横浜を往復し、千五百両もの巨利をあげたというエピソードの持ち主である。

また、1860(万延元)年、生糸の横浜直送禁止令(五品江戸廻送令)が幕府によって出されると、生糸の値段が暴落したが、若尾兄弟はこれが長続きしないと予想して、上州などの生産地の生糸を大量に買い付け大もうけをした。

明治の初年、商館での売り上げ金300円をふところにして野毛山の坂にとりかかった所、強盗が現れて全額取られてしまった。しかしそののち、幾造は野毛山に広大な地所を手に入れた《現野毛山公園(動物園)や横浜市中央図書館の辺り》。

1872(明治5)年には、その資産は20余万円に達した(「甲州財閥物語」)。ところが、その後の商売はうまくいかず資産は半減したので、1876(明治9)年、兄弟は財産を4万円ずつ分配した。幾造は逸平から独立し、その資金で、売込問屋を横浜本町2丁目に開業した。

1879(明治12)年、幾造の生糸売り込み高は横浜で上位五店舗にランクされた。

1880(明治13)年、横浜商法会議所設立時の役員に選ばれている。

1889(明治22)年、第1回横浜市議会議員選挙に当選。翌年横浜蚕糸貿易商組合の副組合長に就任した。この間初代幾造は横浜有数の貿易商に成長していた。

②二代目幾造(1857～1928)

父と同じく甲州中巨摩郡在家塚村生まれ。幼名は隣之助、長じて林平と称す。

1894(明治27)年、横浜財界の有力者を糾合して「横浜取引所」を設立して初代委員長に就任した。1895(明治28)年に設立された横浜商業会議所の発起人七名の一人に名を連ねている。

1896(明治29)年初代幾造の死去にともなって家督を継ぎ、幾造を襲名した。

1913(大正2)年、若尾山に建立されたとみられる「若尾幾造頌徳碑」の写し(藤沢市文書館所蔵)によれば「外国商人に生糸を売り込む共同販売組合を設立しその理事長となり、日露戦争では献金の功勞により叙勲された。また多額納税者として貴族院議員に勅選され、現在(大正2年)は衆議院議員である」と記されている。また財界人としては横浜電灯会社重役、横浜電線会社重役、日本鉄道重役、東洋汽船会社重役、横浜若尾銀行頭取に就任した。1922(大正11)年に家督を3代目幾太郎に譲った。

(3) 幾造の藤沢進出

鎌倉郡中和田村(現横浜市泉区)の持田角左衛門は代々の農家であったが、1889(明治22)年、生糸製造業を開始した。その生糸を横浜の若尾幾造(初代)の店に持ち込んだ。これが若尾家と持田家の繋ぎの最初である。

1893(明治26)年、初代幾造は若尾商店の製糸金融部門を独立させて、横浜若尾銀行を創設した。同年藤沢駅《開業は1887(明治20)年。この年、東海道線は国府津まで開通した》付近にその支店を開設した。持田角左衛門は1893(明治26)年幾造の協力により、生糸製造業者を糾合し、生糸共同販売団体の「相州盛進社」を創立した。幾造は盛進社の会員に良質な生糸の生産を指導するとともに、融資を行ったのである。

さらに幾造自身も1895(明治28)年、鶴沼村石上に若尾製糸場と呼ばれる、繭の茹で釜200個という大規模な工場を操業した。それが、明治30年代初頭には資本金5万円、生産額約千五百貫、収入金8万余円、職工数205人を数える県内でも有数の大工場になった。更には、1904(明治37)年には明治村(羽鳥～辻堂)に第二若尾製糸場も開業した。

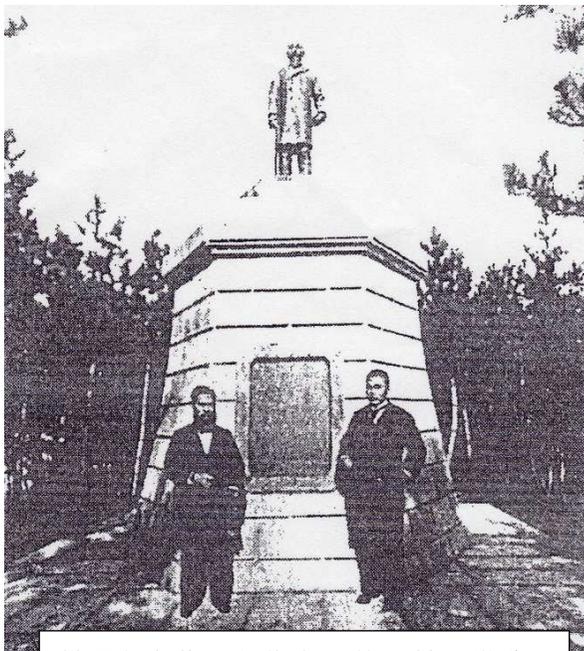
ここまで「幾造」の名が何回か出て来たが、初代幾造は横浜での生糸貿易が主たる任務で、藤沢進出を決めたのは初代であったが、その後の実務を担当したのは2代目であった。

持田角左衛門は1901(明治34)年に病没し、初治郎が後をついだ。二代目同士の間は依然として緊密な関係であった。それが証拠に幾造をはじめ盛進社員らの拠出金によって1906(明治36)年、若尾山の一角に角左衛門の功績を記念する銅像が建てられた(次頁写真参照：中央が持田角左衛門銅像、向って左2代目若尾幾造、右持田初治郎)。

若尾家の藤沢における土地の取得は、旧土地台帳によれば1893(明治26)年9月

となっており、当時の公図は手に入らなかったが、地番 115 は今の市役所新庁舎の辺りである。その後 1901(明治 34)年には、地番 128 を買得しているが、それが今の市役所旧庁舎(現在工事中)、税務署、NTT、簡易裁判所から若尾山公園にかけての土地である。明治 26 年取得の土地と明治 34 年取得の土地を合わせて、約 1 万 3000 坪の広さ《1940(昭和 15)年の「横浜貿易新報」による》だという。

この若尾氏所有の土地は一般に「若尾山」といわれた。



持田角左衛門銅像と2代目若尾幾造

「若尾」の地名は、昔、東海道線と交差する「若尾踏み切り」というのがあったが、今は無く立体交差となり、東海道線の下をくぐり、市役所旧庁舎の階段下の道路となっている。今は僅かに朝日町に「若尾山公園」という地名が残るのみである。

(こいけ きよし)

《 参 考 文 献 》

「甲州財閥物語」 「山梨県人物・人材情報」 「藤沢市史」第6巻第2章
「若尾山から消えた銅像」萩原史巨 「いずみいまむかし」横浜市泉区発行
「横浜市史」第3巻 「横浜成功者名誉鑑」有隣堂 「横浜市史稿」産業編
「横浜人物伝」かなしん出版 「横浜近代史辞典」
その他：全部事項証明書、公図、旧土地台帳等

わたしの鵜沼の思い出 <1>

鵜沼のサーフィンの歩み

内藤 喜嗣 (会員)

鵜沼の遠浅のスバラシイ海浜は早くから波乗り・
サーフィンのメッカとして、若者を捉えてきた

はじめに

1919(大正8)年に鵜沼下岡(鵜沼海岸)最東南端の砂丘(これより先は海辺まで引地川と砂浜だつた)を引き受けた祖父、内藤彦一はあまりな荒漠地に思案して、アメリカのシアトルからポータブルハウス(組み立てハウス、現在のプレハブ住宅の原型)のキット(トレーラー入り家屋一式)を輸入して、1920年7月、別荘として建てた。以後、夏は海水浴、他は会社の青年の研修に使われていた。関東大震災では近辺で唯一、倒壊せずに残った。1933(昭和8)年、湘南海岸道路・片瀬橋の開通を機に、釣好きな父は江ノ島での釣を楽しむために、増築して引越し、常住とした。ここで、私は1935年11月に生まれた。<写真① ②>

先の『鵜沼』106号に掲載の小林勝法会員の研究論文「鵜沼海岸でのサーフィン発祥前史」は、氏が文教大学国際学部教授で文教大学湘南総合研究所の研究助成を受けて行なった「湘南地域におけるサーフィン発祥」(2011年度)の研究成果の一部として発表されたものである。私が以前、大学の後輩にあたる青年が発行していた江ノ島周辺探索発見マガジン「探検隊」15 腰越号に掲載した「鵜沼海岸のサーフィンはこうして始まった」(2002年3月1日号 pp.19-25)を目に留められ鵜沼郷土資料展示室に調査に来られた。これが切っ掛けとなり、調査研究されたものである。

古い記憶と資料の紛失で間違いもあったが、探索していただいたことに、この場をかり、お礼申し上げる。

鵜沼海岸での波乗り・サーフィンはこうして始まった

鵜沼海岸でのサーフライディングの始まりを話すには、都会に蔓延が始まった伝染病の肺結核が都会人にとって脅威であったことを、まず述べなければならぬ。わが国の保健衛生上の対策として西洋医学が重要で、この指導にドイツから招かれていたエルウィン・ボン・ベルツ博士が、ヨーロッパで最も適した予防・療

法は「空気清爽にして、冬季は温暖な地に移り住み、海浜ではオゾン(酸素)を多く含んだ海気を吸い、海水浴をする」ことを説き、博士自身相模湾沿岸での調査を行っており、鵠沼海岸も適地とされていた。これを受けて東海道本線の開通を翌年に控えた130年前の1886(明治19)年夏に、汐湯治のために鵠沼海岸海水浴場が開設された。これが都会人の人気と成り、瞬く間に海水浴はニットの水着の開発とともに行楽、レジャーにと普及した。

湘南海岸は7月も半ばを過ぎると土用波(熱帯低気圧、台風によるうねり)がやって来る。1909(明治42)年の絵葉書<写真③>に見られる、この波と戯れる浮き輪乗り、板子乗りと言う老若男女の楽しみを増していた旧来からの波乗りについて触れておかなければならない。

漁船の敷板(板子・いたご)を使って始められた板子乗りは、よく言われる洗濯板のサーフなどではない。50cmやそこらの波型の溝が切り込まれた板っぺら(洗濯板)ごときでは何のテクニックも出来ない。節のない、きっちりした杉の柁目で尺二の八分板を三尺(約90cm×36cm×2.4cm)使って、端から三寸(約9cm)の所に回し鋸で横長円の手掛穴を開け、表面を仕上げ鉋で仕上げた後、砥の粉で磨き上げて出来上がる専用の波乗り板が作られた。こうして自家用、海の家での貸し出しの板子を使っての波乗りは大変な人気になった。<写真④ ⑤ ⑥>

幼い時から鵠沼で暮らした女流作家の内藤千代子は、1908(明治41)年から博文館の月刊誌「女学世界」に投稿し人気を博した。1914年に連載された「生い立ちの記」の一節「歓喜に輝ける夏」の中に当時の海水浴の情景が伺えるので、ここに紹介する。

「けれど何と言っても一番待ちかねてたのしかったのは夏季の海水浴でした。当地の海は遠浅ですけれど割合浪が荒いので『波乗り』には持ってこいなのです。痛快ですよ。板子一枚に身を託して、小山の様な大波と共に、つーと岸边をさして突進する愉快さ。抜き手を切って泳ぐ、浪の底を潜りっこする、流石女の児で、頭髪のことが少し心配になりましたけれど、そんな事は最初の中、興が乗ってくれば夢中になってしまいます。」

このように大正期に波乗りがもてはやされ、水着姿の芸者のプロマイドの小道具にも使われたほど新時代の若者の夏の楽しみだったようである。<写真⑦>そして1923(大正12)年の関東大震災で隆起して広がった海浜の管理・運用による湘南海岸公園の構築、小田急江ノ島線の開通が都会からの夏の日帰り行楽の人気を高め、波乗りをする若者はいろいろのライディングのテクニックを編み出し、



①1920(大正9)年
内藤家の組み立てハウス



②1920年7月、鶴沼海岸の砂丘から
鶴沼海岸別荘地の最南端を望む。



③1909(明治42)年の鶴沼海岸海水浴場の絵葉書。既に、鶴沼海岸では板子を使った波乗りが行なわれていた。



④1935(昭和10)年頃、右近家の海水浴記念写真。地元の男子は大抵、板子(波乗り板)を持参して波乗りをした。



⑤当時の波乗りは板子乗りと言い、釣り船の底槽の舟板の板子を使って始めたことから名付けられたと思われる。
波乗り板の作成図面



図2 板子

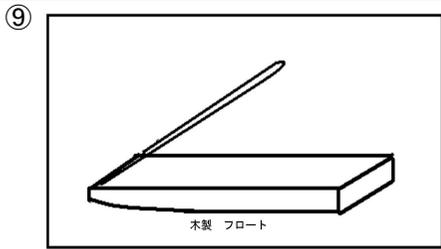
⑥別荘名の焼印を押し、キャラクターのイラストを書くのがはやった。海の家でも貸し出されていた。



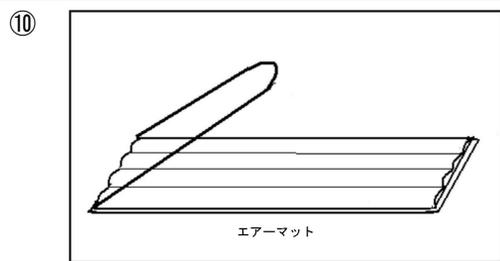
⑦
波乗り板を抱えた大正期のプロマイド



⑧1919(大正8)年頃の葦ず張りの海の家。浮き輪とともに波乗り板も貸し出されていた。(高木和男家提供)



⑨



⑩

技を競うようになっていった。

私が物心付いた時には我が家にも[海岸 内藤]の焼き印が押され、イラストが描かれた波乗り板が何枚かあり、見よう見まねで波乗りを楽しんだ。しかし、あの忌まわしい戦争で海水浴場は閉鎖、海水浴には許可が要るようになり、海岸にはひと気がなくなった。波乗りが本格的に盛んになったのは、戦後になってからのことである。

戦時中の海岸の荒廃は引地川の河口を、また片瀬との境まで蛇行させていた。進駐軍の命令で河口の切り替えが行なわれ、半月湖(溜まり)は埋め立てられ、湿った平坦な海浜は復活した草野球(砂野球)場となった。秋から翌年の夏まで多くのチームが作られ少年達はあちらこちらで戦っていた。これらのチームはそのまま夏の間は、波乗りのグループとなり、一番波でのライド(一番沖で立ち上がる大波に乗ること)に挑戦した。そして波乗りの技に板抜き、板返し、横板などを取り入れ腕を磨き、素乗りが出来なければ一人前の仲間には入れなかった。

素乗り(ボディ・サーフィン)はブレイク寸前の波を捉え、ガムシヤラにバタアシとクロールでボトムまで搔上げ、波に押されるのを感じても更に搔上げ、スープ(泡だった白い波)の前に頭が出て初めて完全なテイクオフ(波に押され波の力

で岸に流れること)となる。両腕を脇に固め、身体を伸ばしてライディングを行なうが、知らず、知らずに体が海老反りになり波に遅れる。片足を膝から折って立つと、ライディングの距離を延ばすことが出来た。

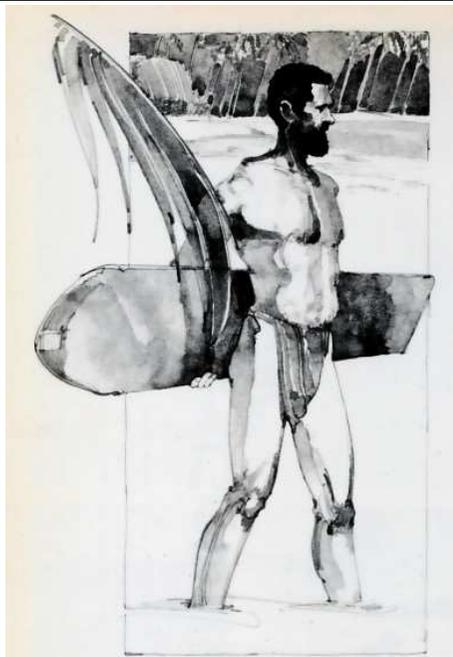
戦争後、海の家は鵜沼の強い波を楽しませるために、いろいろなことを取り入れた。最初はトラックの大型のチューブの浮き輪、これで波に乗る。当時は進駐軍の払い下げだったゴムボート(救命ボート)、木で造った150×60×15 cmの底がロッカー(弓なりにカーブをつける)の空洞の箱の両先端にロープをループに結び、立って波に乗るフロートを貸し出していた。これでは崩れて白くなったスプの波にしか乗れなかったうえ、ぶつけて怪我人が出たりしたので1～2年でスポンジを布のシートで包んだものになった。これはその後が開発されたエアーマットに変わっていった。<写真⑧ ⑨ ⑩> そんな中、FRPのボードが開発されたサーフィンが鵜沼海岸にも登場し、ウィンドサーフィンなど派生のボードライドに発展してきた。文献を検索したが、鵜沼が一番早かったのではないかと思う。

鵜沼海岸に新しい波乗りサーフィンがやってきて

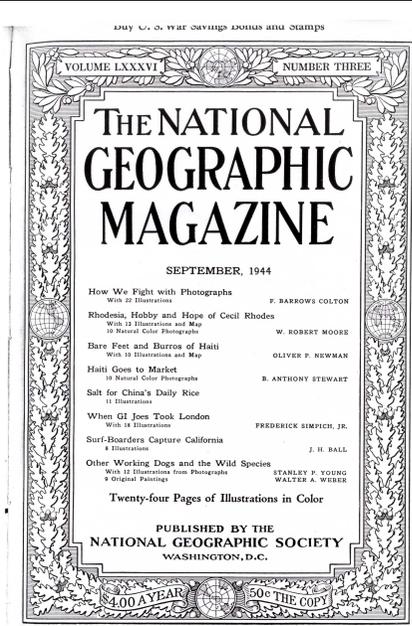
その痛快な魅力は老若男女を虜にした

我々の祖先の遙か以前から、太平洋沿岸に打ち寄せる波のパワーに関心を持ったものは太平洋の島国のポリネシア人のなかにもおり、タヒチでは1500年も前から波乗りをしていたと云われている。そして現在のサーフィンの元祖はハワイに移住したポリネシア人で、南極からはるばる寄せてくるビッグウェーブ(大波)に興味を持ち、自ら編み出した波乗りをした。ウイリー・ウイリーと云う軽い木がハワイに存在したことが幸いし、アライアという小さなボード<写真⑩>と5mもあるオロというボードを、ビッグウェーブ用にスタンディングスタイル(立って波に乗る)のサーフ・ライディングを編出し、発展させてきた。

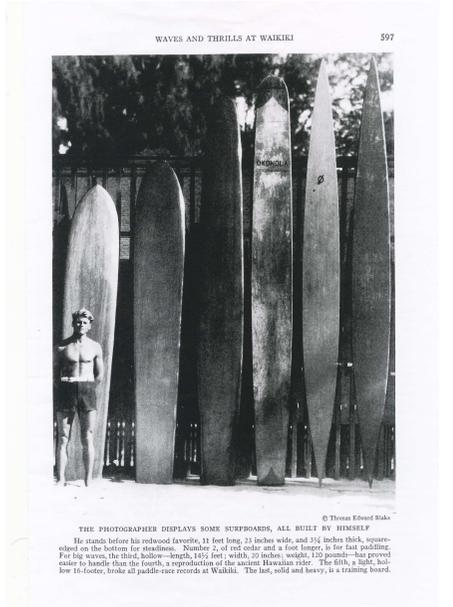
これを1778年にハワイを訪れたキャプテン・ジェームス・クックが目撃して、衝撃を受けたことが記録に残されている。その後、ハワイの名サーファーのデューク・パウオア・カハナモク(Duke Puaa Kahanamoku)が1912(明治45)年のストックホルムオリンピックの水泳100m自由形でアメリカ代表として出場、世界新記録を樹立。これで名を挙げハワイの民間大使として世界各地を訪問、サーフィンの普及に大きな役割をはたした。これを機にアメリカのカリフォルニア、オーストラリア、南米大陸の若者のマリンスポーツとしてサーフィンが広がり始めた。しかし1940(昭和15)年、開催予定の東京オリンピックが中止になったように、戦



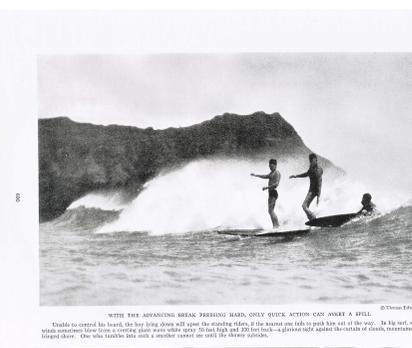
⑪ ハワイの古い絵葉書 アライアのボードを抱えるポリネシア人



⑫ 最初にサーフィンを知った The NGM (ナショナル・ジオグラフィック・マガジン) の表紙
1944 (昭和 19) 年 September (9 月号)



⑬ The NGM 1935 (昭和 10) 年 May (5 月号)
Photo ワイキキ・ハワイ
Thomas Edward Blake 撮影



時色が強くなった日本には、親善大使のデューク・パウオア・カハナモクは来日せず、日本へのサーフィン紹介の記録は見当たらない。

戦争が終わり、父が祖母の事業の復興の準備をしていた時に、GHQから召喚されたが、その理由は1945年4月に江ノ島沖に墜落したB29爆撃機の生存していた搭乗員の取り扱いについてのことであったようだ。戦前、祖父、父ともに米国ニューヨークのメイシー百貨店に在職しており、ストラウス会長、ホーン社長のマイヤー家との親交があった事を召喚された折に話した。このことで後日、先方から父の消息捜査依頼が出されていた事がわかり、GHQの高官との親交が始まった。中でも陸軍第8軍のショール大佐、デイビス少佐は鵜沼の海岸・江ノ島が大好きで度々我が家を訪れていた。そして1947(昭和22)年にMr. デイビスからプレゼントされた大量のアメリカの古雑誌の中に、黄色い表紙で綺麗な写真満載のNATIONAL GEOGRAPHIC MAGAZINE (NGM)があり、その中に立って波に乗る波乗りの写真があった。これがハワイのサーフィンと言う波乗りであることを、その時初めて知った。<写真⑫>

ここで、私の記憶違いで先述の小林勝法教授に大変ご苦勞を掛けた経緯を記したい。実は戴いたNGMには大変綺麗な世界の写真が満載されていたのと、月刊誌だったことで父が大変興味を持った。それを知ったMr. デイビスがその年のクリスマスに、年間購読のプレゼントしてくれたのである。その中で私が先に見たサーフィンの場面を「探検隊」15腰越号に掲載したということで、小林教授は1947年以後の発刊冊子を検索したが見当たらず以前のバックナンバーを検索し始めた。

NGMの1935(昭和10)年5月号と1944(昭和19)年9月号のハワイ・カリフォルニアでのサーフィン特集のビッグウェーブのサーフ・ライディングの写真を、防衛大学図書館で発見してくれた。以前、私は国立国会図書館で探したが見つからなかった。小林教授も同じで、防衛大学まで足を運ばれ見つけたのである。この二冊の冊子には、デューク・パウオア・カハナモクからカリフォルニアで手解きを受けたトーマス・エドワード・ブルック(Thomas Edward Blake)がハワイに赴き、さらに腕を磨くと共に様々のボードの開発をしたことが記載されていた。そしてカリフォルニアに戻り若者の指導を行っていたのである。(これは戦争末期のことで日本では考えられないこと)<写真⑬ ⑭>

サーフボードの製作に初めて挑戦

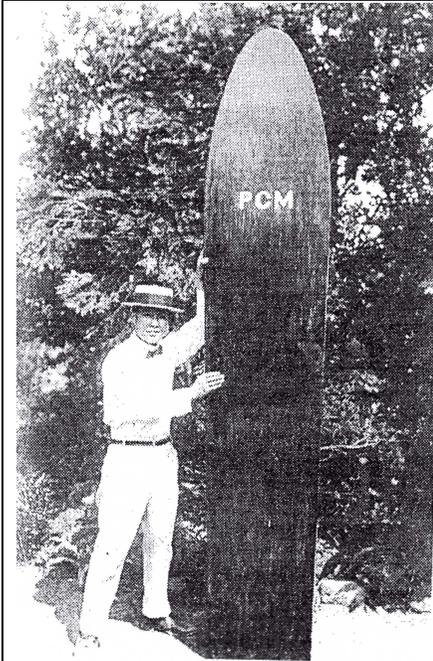
私はこの写真が刺激となり、サーフボードの製作に挑戦した。当時はハワイ、

カリフォルニアでもボードの材料は木材で、ウイリー・ウイリーやバルサの軽い木が使われていたが、材木屋の話では日本には桐材しかなく、水を吸いやすいし、弱い上に幅広の板など目玉が出るほど高価だと笑われる始末だった。

大工の大村工務店で尺五の一寸五分の二間ものの杉板（約 45cm×4.5cm×3m 60cm）に鉋掛けをしてもらい、写真を見ながらノーズとテールのアウトラインを整え、ノーズから 50cm ほど鉋でロッカー（そり）を心持ち付けた。当時の写真を見るとスケッグは付いていなかった。型だけは出来たボードを我が家に運ぶのは容易ではなかった。なにしろ重かったのである。気は焦るが反面恥かしくもあったので、夕方まで待って海に出た。膝ぐらいいまで入った所でボードを投げだした。やはり重いボードは水面ぎりぎりには浮かばなかった。腰の深さの浅瀬でスープレの波で試そうとした。レールを掴んでしかるべき波が来たところでボードを前に送り出し飛び乗ってパドリングをするが、所詮、厚さのある板に心持ちロッカーを付けただけのノーズは海面に突き刺さってしまい（パーリング）、このどでかいボードは跳ね上がった。

少しテールよりのレールを掴み試みるが今度はノーズが上がり過ぎ、波のパワーを掴めず、おいていかれた。少し前からボードの上に正座して漕ぎ上げる（ニー・パドリング）のだが、ボード自体が水中にあるので加速しない。こんなことを一週間ほど夕方になると行なったが、テイク・オフしてもストール（失速）してスタンディングのサーフライディングには至らなかった。そしてボードは水を含み、益々重くなり、ついにギブアップ。哀れボードは庭の木陰のバーベキュー場のテーブルに変身した。

話は飛ぶが、こんな挑戦を昭和 10 年頃に既にしていた人が茅ヶ崎にいたことを、茅ヶ崎海岸にある神奈川県湘南なぎさ事務所内の「なぎさギャラリー」を訪れた時に偶然知った。湘南海岸の発展を記したパネルの中に昭和 10 年頃一枚の写真がある。<写真⑮> その写真には、昔のハワイの絵葉書の中でポリネシア人が抱えているアライアのボードと同型のボードを脇に立て掛けている方が写っていた。その方は茅ヶ崎の高橋金太郎氏のお父上で当時、役所の土木課の役職をしていられたそうである。そのボードは茅ヶ崎館が所有しており、現在もそこに保管されている。茅ヶ崎館は、大正・昭和初期に多くの文人が逗留し、小津安二郎監督の常宿として知られた由緒ある庭園の旅館で、その庭先にかのサーフボードがベンチとして残っていたのである。ボードはウイリー・ウイリーではなく、檜の立派な柁目の板で出来ていた。<写真⑯ ⑰>



⑮昭和 10 年頃のアライアと同型の
ボードを立て掛けている。

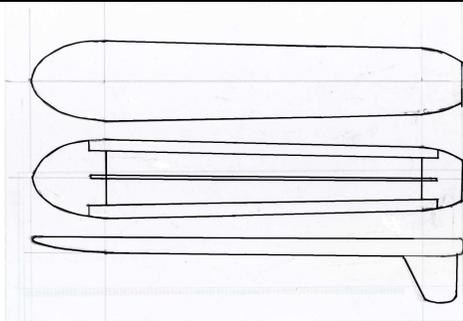


⑯



⑰

⑯ ⑰
茅ヶ崎館の庭に置かれていた 1935 (昭
和 10) 年頃に作られたサーフボード



⑱ 1951 (昭和 26) 年頃にチャレンジし
た合板製のサーフボードの図面



⑲ポリウレタンフォームFRPの新た
なサーフボードライディング

お会いしたのは第4代目の当主の森 勝行さん(昭和5年3月4日生れ)と子息で専務の森 浩章さん(現・第5代目当主)。お二人が言われるには、先代がハワイのサーフィンを見て、お客様の為に真似て作ったけれども、重たくてサーフィンとしては使えなくて、浮き袋の様に掴まって遊んでいたそうだ。やはり日本の材木ではサーフィンは無理であったようだ。お客様は海に行くときに面白がって持って行くが、帰りは重いので、そのまま海に置いて来るので、翌朝、下僕が回収してきたそうだ。貴重な物だから収納保管することを勧め、辞した。

サーフライディングをはじめて目の当たりにした

昭和26年の夏、第二の切っ掛がやって来た。米兵で賑わう西方の海岸で何やらボードの上に立って波乗りをしている日系二世の二人のG Iを見掛け早速、仲間の前沢長継と声を掛けてみた。幸い彼らは片言の日本語が話せた。彼等のボードは張り子の3m程のくさび型をしたベニヤ製のもので、以前写真で見たウィリー・ウィリーのオロとは違っていたが、実際に初めてサーフライディングするのを見せてもらった。

ニー・パドリングでテイクオフをし、レギュラー・フット(右側のレールに体を向ける、つまり左足が前、右足が後ろのスタンスでストリンガーの上に立つ)で緩いトップ・ターンを行って浅瀬までライディングするだけであったが、感激した。何しろこのボードも浮力はあったが重いのである。したがって、コントロールするのが大変で、精々背丈程の深さで、1~1.5mぐらいの波でしかサーフ出来なかった。彼等(Mr. 船越 Mr. 松井)は、翌週もボードをジープに積んでやって来た。しっかりマークした私と前沢は夕刻には指導をして貰えるまでになった。そして、その夏の終わり頃、彼等のボードを一週間借りられるチャンスを得た。午後から吹き出した風が強風になり、ボードをジープに積んで帰るには厳しい状況になった。ならばと一番海に近い前沢の家で預かることになった。このチャンスに寸法、ラフスケッチ、簡単な図面を起こす事ができた。この時のボードには飛行機の垂直尾翼を下向きにした形のフィン(スケッグ)が付いていた。

再度、サーフボードの製作に取り組む

そして翌27年に向けてサーフボードを作ることになった。〈写真⑱〉

材木屋に5mm×2400mmの耐水ベニヤとノーズとテールに使う尺5寸で2寸(約15cm×6cm)の良く乾燥した柾目の杉板、レールには5寸角(約15cm角)を半分

に割いて貰って使う事にして、これ等を頼んだ。大工が「乾燥が良くないと水漏れ、ガタがすぐ来るぞ」と云うので、年明けの乾燥期に作ることにして、それまで材料は縁の下に置いて乾燥することにした。制作までの4ヶ月はああでもない、こうでもない、図面を何回も引いた。当時は今のように良い接着剤は無く、模型用のセメダインでは大変高いものになる。煮立てた膠が普通だが海水にどれ程持つかが一番の心配であった。結局コールタールを内側に塗り、ノーズ、テール部分の板に導穴をくりぬき水抜き栓をつけることにした。

四苦八苦の末、4月初めに形に成った。塗装は防水に良いという白いペンキを塗ったが、これが曲者で、なかなか表面が硬化しなかった。痺れを切らし5月の中頃に海に出て、初のライディングを試みた。

ボードはとても重いが浮力はかなりあったので、ニー・パドリングでテイクオフすることができた。しかし、終わって見ると塗料に砂がめり込み、デッキやボトムは、まるでサンドペーパーの様な有様であった。

塗料を替え、ようやく7月の土用に間に合い、自前のボードでサーフィンが出来たが、またしてもボードが重く待望のパワフルなウェイブにライディングすることは出来なかった、

今考えると当時はワックスの効用には気が付かず、水中でのボードの扱いに無駄な苦労をしたものだと思う(ワックスを使い始めたのはポリウレタンフォームのFRPボードが開発されてからだ)。

この年は結構頑張ってライディングをしたが翌年は受験勉強で、大学に入ってから馬術部に入った関係で暫くサーフィンの回数も減り、ボードの手入れを怠ったので、ウッ드의ボードとはお別れすることとなった。就職をした翌年、1959(昭和34)年の秋、またしてもジオグラフィック・マガジン(<NGM>)にサーフィンが新たな素材の開発により革命的な発展を迎えた事が掲載されているのを見た。アメリカ西海岸のカリフォルニア州サンジェゴでの、ポリウレタンフォームのFRP(ガラス繊維と不飽和ポリエステルから作られる強化プラスチック)コート製のすばらしいロッカーのサーフボードでのライディング・シーンの写真が掲載されていた。<写真⑱>

そこには非常に軽く強度がある事が謳われ、新たなスポーツとしての発展が期待されると記述されていた。そして文中には、既にスポーツ・マニア向けの雑誌[SURF MAGAZINE]が発刊されていることが記されていた。

早速当時、東京駅丸の内南口にあったアーケード内の輸入雑誌専門店でオーダ

一し、2ヶ月後に手にいれることができた。(以降3年ほど購読していた。それらは大事に保管していたが、平成2年の家の建替時に不要書籍の処分に紛れたのか？紛失して、今はなく残念である)

当時の記事は、基本的なサーフィン・ライディングのメソッドが主で波の名称、読み方から始まり、バランスの取り方、ライディング・ポーズ、パドリング、沖へパドル・アウトするために波をかわすテクニック、ゲッティング・アウト、そして実際のライディングで、再度パドリング、テイクオフ、ターン、カットバック、途中でライディングを止めるプルアウトやストールアウト等のやり方が写真と共に隔月に掲載されていた。またボードの宣伝の他に、DIYの為の一式揃ったキットの通販広告が目立った。中でもアメリカのクラークフォーム社は記事として、ボードの製作プロセスと自社のキットでの製作方法を指導していた。

そして科学技術により生まれ変わった新たなサーフライディングが、ハワイ、アメリカ西海岸、オーストラリア、南アメリカ、南アフリカ等で、若者の心を捉え、これが驚異的早さで全世界に広まって行く様を写真と共に毎月報道し、また次から次へと改良されるボード、テクニック、サーフ・スポットなど向う見ずのチャレンジャーの記事は、熱い衝撃であった。

ボードの材料で苦戦を強いられる

戦後の貧困からまだ抜け切れない日本では上記のキットさえ輸入する事が出来なかった。然らばとクラークフォーム社の記事に習い、自己製作に取り組んだ。

グラスファイバークロスと不飽和ポリエステル樹脂は義兄が勤める日立化成(株)から、ポリウレタン・フォームのブロックは日立化成に無く積水化学(株)から調達した。しかしフォームのブロックは長さが最大2mの物しかなかったので、ストリンガー(強度を増す為の構造材、ヨットやボートのキールに当たる)を十字にクロスさせ、長さを2m60cmとして予めロッカーに合わせ加工し、フォームのブロックを張り付けた。そしてテール部分にはフィン(スケッグ)を差し込めるように二股にストリンガーを加工し、硬い木で作ったテールを取り付けた。これで準備は出来たが、電動のカンナが一般には無い時代である。思案の揚げ句、アウトラインやシェーブラインの型をベニヤで何枚も作り、これに沿って切り落とすことにした。だが、回し鋸、糸鋸では旨くいかず、苦肉の策にニクロム線を伸ばし竹の弓に張り、トランスで電圧を下げた所、丁度旨い具合の、電熱によるカッティングの道具が出来た。型板に合わせ少しずつ切り落としていき、何とか

頭に描いていたロッカーのボードの下地が出来上がった。

いよいよガラス・クロスを被せ、コーティングを行なうことになった。不飽和ポリエステル樹脂は液体で、少量の反応剤を混ぜることにより凝固が促進されガラス・クロスと相まって硬く、強い強度でボードを覆うことになる。だが現在のように技術統一が成され、パーメックのような便利な反応剤は無く、企業秘密と称する2種類の薬剤を量、順番を間違えないように扱わなくてはならなかった。これが大変な落とし穴で、案の定、大失敗となった。

積水のフォームに日立の樹脂、薬剤が反応して、せっかくシェープ成型したボードの下地は表面が波打ってしまい、使い物に成らなかった。幸いクロスと樹脂は十分に手に入れてあったので、日立化成に2m50cmのポリウレタンホームのブロックを成型してもらい、最初から再度挑戦した。こんな事で休日はボードの製作にのみり込んだ。サンドペーパーで身体中真っ白になりながらサイジング（滑らかに磨く）しては樹脂掛けを繰り返し、ストリンガーの溝にベニヤで作ったフィン（スケッグ）を取り付け、クロスを掛け、樹脂でコーティングして仕上げた。

当時のフィンも飛行機の垂直尾翼の形をしていた。こうして待望のボードが出来たのは1961(昭和36)年の5月末だった。専用のワックスなどは無いから太めのローソクでレールやデッキをワキシングして、次の休日(仕事の関係で月曜日)の初ライディングに備えた。ところが何たる事か、水曜日に急性盲腸炎が発症し手術、入院と言う破目になり、結局7月の末まで待たねばならなかった。

ウレタンフォームのボードは大変軽く、今まで苦勞したテイクオフも容易に出来た。多少ノーズ部のボトムはロッカーが緩く直線的だったので、ノーズがバーリング(ノーズが海中に突き刺さってしまうこと)し易いので、速めで強いパドリリングが必要だった。そしてマガジンで仕入れた頭でっかちのテクニクへの挑戦を始めた。しかし鶴沼の波はダンパー(海岸線に平行して一気にブレイクしてしまう波。プランジング・サーフとも言う)が多く、ワイプ・アウト(ボードから落ちてしまうこと)を繰り返した。当時はパワー・コード(ボードとサーファーを繋ぐ流れ止め)が開発されておらずボードをよく、流してしまった。

本場のサーフボードを手に入れる

1965(昭和40)年頃になり、高島屋のスポーツ用品部がサーフ・ボードを仕入れたので買って欲しいとのこと。そこで購入したのがデッドのボードで、それ以来デッドと付き合っている。(テッドのボードは阿出川 輝雄がアメリカでシェーピ

ングを修行して帰国、テッドを設立した)。付け加えるに当時はサーフィン用のウェットスーツは無く、シアーズの通販でダイビング用を購入したが、なじまなかった。サーフィンのライディングシーズンは、5月のゴールデンウィークから10月末であった。しかし折角手に入れた私のサーフィンの楽しみは日本の経済成長の波にのまれ、休日も無く仕事に追い立てられ、早朝の一時を惜しんでのライディング(4時起床、6時半まで)しかできず、それも遠のくこととなった。そして何時の間にか還暦も過ぎ、家族からの制止、体力との戦いになり、ライディング前にはジムに通い、身体を整えてからと寂しい限りとなった。

本格的なサーフィンの始まり

この鵜沼海岸がサーフィンのメッカになったのは、遠浅の海浜が広がり初心者からベテランまでが楽しめるロケーションなのは言うまでもないが、かつての波乗り少年達がサーフィンと出会い世間に広めたことを付け加えたいと思う。

さらに、ウレタンのFRP製ボードが開発された後の1961(昭和36)年7月に、米海軍のパイロット中尉のTomが海岸を訪れ、鵜沼海岸の波乗りグループの若者達に鵜沼での本格的なサーフィンをもたらした。

この経緯は、佐賀 亜光、松田 功両氏の執筆文に詳しいので以下に掲載する。

1962(昭和37)年に佐賀兄弟(和光、光三、亜光、後に末の直人も参加)を中心に松田 功・章兄弟・日高 健・小島 誠・米沢・大津・大串・杉浦ら湘南学園の卒業生を中心にしたメンバーにより、クラブ「サーフィング・シャークス」が結成された。以後、連盟の結成、大会の開催、さらに当時若者に人気の週刊誌「平凡パンチ」の後押しでサーフィンの普及が始まった。

“日本のサーフィン史”

佐賀 亜光

その草創期の話

現在は日本全国至る所でサーフィンを楽しむ人達が大勢いる。これ程の広がりになるとは草創期には想像もされなかったが、それだけサーフィンの持つ魅力、波を切り風を切る爽快さ、ボードを思うように操るテクニックの面白さ、大波に立ち向かう勇気と胆力等にどれも男らしさを感じさせる魅力なのであろう。

健全な精神は健全な肉体に宿る。サーフィンという遊びを通じて健全な肉体と健全な精神がはぐくまれることであろう。

鵜沼サーフィン事始め

さて、鵜沼のサーフィンの歴史は、というより日本のサーフィンの歴史はこの鵜沼海岸から始まるのである。その発祥の場所は現在のサーフヴィレッジ前の海である。夏になると海水浴場とサーフィンサイトを区分する白杭の列のあたりから、やゝ片瀬西浜に寄った辺りが発祥の海岸である。

昭和20年代後半、海水浴場は引地川の西にあり発祥の地は地引網漁師の漁場、駐留軍兵士達の野外バーベキューの場であり、地元の少年達の遊び場であった。砂浜で野球をしたり海で泳いだりしていた少年達は、徐々に波乗りをするようになった。といっても一枚の板を使って、板の上に腹ばいになって波の壁を滑り降り、砕けて白く泡立つ波に乗って岸まで行くのである。この板は厚さ1センチ前後、幅30~35センチ程度、長さ60~70センチ程のものでみな手作りであった。

前方に拳より大きめの長方形の穴があり、そこに左手を入れて掴み、右手で水をかいて波のスピードを捉えて乗るのである。板を横にする横乗り、1~2回のスラローム等の技を披露する者もいた。現在のブギーボードの元祖である。

昭和20年末にはフロートが登場した。これは当時ハワイに旅行した人がサーフィンを見て帰国後、サーフボードをイメージして作ったものといわれている。骨組みを組んでその外側に厚さ1センチ、幅9センチの板を打ち付け、隙間に石綿を詰めペンキで塗装仕上げしたものである。その為一時間もしないうちに中に水が溜まって重くなり、バランスを取るのが難しかった。カヌーのようにパドルで漕ぎテイクオフをし、前の方についている手綱を持って立つことも出来るが、水抜きをしなければならぬこと、運搬に不便なことに加えてコストも高く、余り流行らずに廃れてしまった。

昭和30年初頭になると、波乗りをする少年少女たちがサーフィン発祥の地に集い始め、コロニーを形成していった。波乗りの上手な少女達の中には、優れて敏捷な動きをして波に乗る少女がいた。細川元総理夫人である。<写真⑳>

そうやって遊んでいるうちに、板乗りに飽きて素乗りが流行り始めた。文字通り身一つで波に乗るのである。ハワイでもボディサーフィンとして知られている。年長の先達が持ち込み少年達は見よう見まねではじめ、忽ちのうちに習得していった。

昭和30年代前半には東急レストハウス等が建設され、サーフィン発祥地は忽ちのうちに海水浴場となり一般遊泳客に混じって波乗りをしていた。特に素乗りは力強い波との力競べと体が波を切る爽快感に波乗りの醍醐味を感じるものだった。

サーフボードの登場

昭和 36 年(1961) 7 月にコロニーにハリウッドの俳優グレン・フォードに似た米海軍パイロットが長尺のサーフボードを持って現れた。彼はそのボードを大波高波をものともせず巧みに操って見事に乗りこなしていた。私と松田章は彼に走り寄り片言の英語で教えてくれるよう頼み込んだのである。これが切っ掛けで現在のサーフィン普及が始まったと一般的には思われている。

彼は快諾し初歩から丁寧に教えてくれた。

それらは

1. テイクオフ(波に乗り始める時に手で水をかくこと)の仕方
2. ブルアウト(前方に人がいたり危険が迫った時に途中で止めること)の方法
3. バランスを崩して海に落ちた時、どのように海に潜ったら怪我をしないか等々、サーフィンのいろはから教えてくれたのだった。

彼は厚木から小田急線で来たのだが、鵜沼海岸で降りる時に帰りは乗車出来ない、といわれたとのことで彼のボードを我が家で預かることになった。数日後、彼の友人達が我が家に車で訪れ、サーフィンした後十数枚のボードを預けていった。その後、日本初のサーフィンコーチは私に 1 枚のボードをプレゼントして帰



⑩1962(昭和 37) 年、念願のサーフボード 5 台の作成に成功、サーフィングクラブ「シャークス」を結成、おそらく日本最初にサーフライドをグループで行ったのは、この鵜沼海岸の波乗り仲間の若者だっただろう。

写真は 1964 年に創刊の平凡パンチのグラビヤに載ったもの (松田功氏提供)

国したが、そのボードは現在、東京都の新島にあるサーフィンミュージアムに保管展示されている。

彼らが預けていったサーフボードは、今でも有名なサーフボード・ハワイ、ゴードンアンドスミス、ホビー、ハンセン等その他総バルサ製ボード等々であった。それらを一番弟子の私が保管管理し、同時に兄弟や友人達に教わったことを伝え、皆それぞれ何とか乗れるようになっていった。

サーフィンクラブの設立

皆が一応乗れるようになり一段落ついたなと思っている頃、ハワイのサーフィン事情は今どんな風だろう、テクニックの変化進化はどうだろうと気になり、東京の洋書専門店に行った。そこでジョン・セパーソン編集のサーフィン専門誌「サーファー」を入手し、テクニックは勿論のことサーフィンクラブの存在とそれらを組織化した協会を知ることができた。そこで我々も仲間て日本初のクラブ「サーフィング・シヤークス」を設立し、サーフィン情報共有やら技術の研鑽に励み、手書き会報を発行したりした。その影響か鵜沼、辻堂にクラブが設立された。「鵜沼サーフィンクラブ」、「シースパイダース」等がある。

日本サーフィン連盟の発足

鵜沼にきた米人サーファー達は帰国する度に、自分たちの中で最も優秀なサーファーを指導者として我々に紹介してくれた。後にカリフォルニア大学の海洋学教授になったガス・A・ジョーンズ氏は学者として波が起きる条件、乗り方で角度によるスピードの付け方等を教えてくれた。又、全米トランポリンチャンピオンで、当時日本トランポリン株式会社副社長のフィル・トリップス氏は波の上での体の使い方、カットバック、ボトムターンの仕方等を教えてくれ、更に台風の近づいた稲村ヶ崎でも乗れるようにポイントの選び方なども教えてくれた。

彼等指導者の他に引地川河口で知り合った、当時世界ジュニアクラス四位のテニス・マッカーは我々に大きな影響を与えたが、特に千葉の鴨川にも遠征していたので、鴨川に集まるサーファー達と知り合う切っ掛けを作ってくれた。

そういう経緯で各地のサーファーと連絡が取れるようになり、1965(昭和 40年)11月、江の島海浜ホテルで私の外各地の7人が集まって、現日本サーフィン連盟が発足した。今年で創設43年(註 本年2016年で51年)を迎えるが、支えてくれた多くの人達に謝意を表したい。

特に発足当時のライフガードの金子さん、小田原さん、藤沢市観光協会、藤沢警察署等の多大な協力、努力により現在のサーフィンエリアの行政的措置及び維持発展がされたことに深謝する次第である。（完）

“サーフィンボードの導入”

松田 巧

1 サーフィンボード導入前の様子

- ① 引地川右岸は海水浴場として客が多く、又、遠浅の海岸とは言い難く、必然的に旧東急レストハウス前辻堂寄りが波乗り場でした。
- ② 同場所は地引き網の船が2～3隻程度あったように記憶しています。主に厚木基地の米兵のバーベキュー場で中型ウェポンキャリアーに半割りドラム缶を載せ、鉄板に丸く穴を明けたタイヤ潜り込み防止板を延々と敷き詰め波打ち際迄運搬していました。
- ③ 缶入りビールに酔い、太いソーセージを焼いて喰い、大声で陽気に騒ぐ米兵を羨ましく眺めたものでした。
- ④ その場所へ地元の少年達が集まり自製の波乗り板で波乗りをしていました。
- ⑤ 私がその仲間に加わったのは1956(昭和31)年で主に湘南学園の生徒で構成されていました。
- ⑥ 当時は洗濯板などと言わず波乗り板、あるいは単に板と呼んでいたように記憶しています。当然素乗りもやっつけていて板乗り、素乗りと区別して言っていました。
- ⑦ 東急レストハウスに人気が出始め海水浴客が増え、反対に米兵の姿は少なくなっていました。
- ⑧ 1961(昭和36)年7月にサーフィンボードで波乗りをしている米兵を見つけて佐賀 亜光君と松田 章が話しかけ色々話を訊くことになりました。(彼は厚木基地の海軍のパイロットで中尉のTomと記憶していますが定かではありません)

2 サーフボードの導入時期

- ① その米兵サーファーはその日の内に大曲の佐賀家にボードを置き帰って行きましたが、一週間後多数の米兵サーファーが来てボードを置くようになったが置かせる代わりに最初の米兵のボードを皆で使い回して波乗りを練習

しました。

- ② 最初の米兵は波乗りのコーチをしてくれましたが、やがて帰国か転勤でいなくなり、代わりにガス・A・ジェーンズという星条旗新聞の記者で海洋学者が指導してくれました。(彼は最も良く熱心に教えてくれました)
- ③ ガスが去り3代目のコーチとしてフィル・トリップスという全米トランポリンチャンピオンが指導してくれました。
- ④ まだボードは米兵のロングボードを借りて乗っていました。
- ⑤ 翌1962(昭和37)年に米兵のうちの一人の紹介によりボードを5本購入、しかしセンターに杉板を使った設計の悪いボードで、我々は潜行艇と呼び評価の低いものでした。(確か1万5千円/本だったと記憶しています)
- ⑥ 1962年頃からサーフィングサイトとして七里ヶ浜、稲村ヶ崎へ乗りに行き始めました。(稲村ヶ崎の波はとてもよく、現在は海底の地形が変わったのか、あの特徴的な三角波が見られませんが)
- ⑦ この年にサーフィング・シャークスが結成され、新聞(といっても手書きで、手書きのイラストでしたが)も作りました。

3 日本サーフィング連盟の発足

- ① 1963(昭和38)年、米兵サーファーのもたらす情報で千葉鴨川にも地元サーファーがいるということを知り、鴨川へ遠征、彼等との交際が始まります。これが連盟創立の切っ掛けとなりました。
- ② この時、平凡パンチのカラーグラビアに日本最初のサーフィングクラブとして紹介されます。
- ③ 1965(昭和40)年11月 日本サーフィング連盟が発足しましたが、この発足に佐賀兄弟の果たした役割は大きいです。
- ④ サーフィング・シャークスは1965年位から現役が少なくなり、クラブとしての実活動はなくなりました。皆社会人となり、又若い社会人も徐々に会社生活に身を縛られていったからと思われるが、佐賀兄弟は現役サーファーとしてその後もずっと活動しています。(完)

これら佐賀亜光・松田功両名の文章から、鵜沼での本格的なサーフィンの始まりが明らかになったが、その後、海水浴シーズンに海水浴場内での無謀なサーファーによるライディングで傷害事件が多発し、藤沢市、警察署により鵜沼海岸で

の夏季のサーフィンは全面禁止となった。そして代表の折衝で小田急プールガーデン(現スケートパーク)前の海浜に150mの指定区域のみが許可された時期があった。

そして現在施行されている夏季の海水浴場区域の開場時期(7月～8月末)、時間帯(8:00～17:00)での禁止を厳守することを基に、遊泳禁止区域での自己責任での完全管理によるサーフライディングが認められ、市民権が得られたのである。

おわりに

では、鵜沼海岸の一角が湘南海岸で一番早く、公式な鵜沼海岸サーフビーチとして指定されたことをご存知だろうか？ このことは、藤沢市営プールが藤沢市から小田急電鉄株式会社に委託され、小田急鵜沼プールガーデンになった時の小田急の担当者の手記に残されている。

鵜沼プールガーデンは1961(昭和36)年7月25日のオープン時に、海賊船をモチーフにした滑り台のプールのほかに、プールと海浜での水泳が出来る施設を目指していた。1954(昭和29)年来、閉鎖していた鵜沼海岸海水浴場(組合理事は市会議員の田辺政吉、小沢定雄、小田急電鉄事業部長)をプールガーデン前浜100mに監視所、遊泳区域標識のブイを設置した安全遊泳区域を設け再開した。そんな折に片瀬東浜、西浜でのサーフィン事故の発生があったが、1962(昭和37)年夏、引地川河口にサーフライディングに訪れたハワイ出身のウオン氏と友人の深谷浄司氏が、これからのサーフィン普及発展に理解を求めべく県砂防事務所・警察・藤沢市への説得を始めた。こうした努力により遊泳区域の東に鵜沼海岸サーフビーチが1966(昭和41)年に設置され、深谷氏は全国に先駆けて貸しボード事業を展開した。さらに小田急鵜沼プールガーデン・日刊新聞社企画部主催、小田急電鉄(株)後援で1970(昭和45)年から3年間、6・7月に年10回のサーフィンスクールが開催され、初期のサーフィン普及に大きく貢献した。

現在は化学材料の進歩が素晴らしく、より軽く理想なシェイプが成されたボードが普及、ゴッデスの鈴木氏が開発したキャリアで自転車やバイクでの運搬が楽になったが、なんといってもウエットスーツの進歩は著しく、オフショアライドが楽しめるのはうらやましいかぎりである。

一方でサーフィンは自然との闘いであることを忘れてはならない。くれぐれもルールをまもり事故の無いことを願っている。

(ないとう よしつぐ)

会員追悼

杉本辰夫さん

鶴沼を語る会の巨星がまた落ちた。6月16日朝のことで、享年88歳。

改めて申すまでもなく杉本辰夫会員は会に大きな貢献を成して来た方である。

多くの功績の中で会員それぞれの記憶に残るのは会誌『鶴沼』のデータ化である。会誌が初期の頃には手書きで読み辛く、その後、活字化はされたものの保存や増刷にはうまく活かされていなかった。杉本さんは、初期の手書きのものは活字化して会誌『鶴沼』の第一号からすべての号をデータ化し、いつでも増刷できる体制を整えた。また毎月の例会通知の作成にも長いこと係わり、ホームページでの会の活動状況を公開することにも尽力された。

一番記憶に残るのは、会の財産であった内藤千代子の書籍原本からの復刻版を作成し、藤沢市総合図書館に原本と復刻版を寄贈するというプロジェクトを成し遂げたことである。会員の誰もが、いつかやらなければと思っていたことを、根気よく続けていた。

私をはじめでの会長職についていた期間（2003～2004年）、副会長として支えていただいた。普段は決して口数が多い方ではなかったが、要所要所で適切なアドバイスをいただき、時には厳しい意見を述べられていた。常に会員同士の融和に気を遣われていた方であった

6月18日の通夜には多くの会員が参列し、ありし日の杉本さんを偲んだ。落ち着いた雰囲気でのなかでの鶴見総持寺僧侶の説法は感銘深いものであった。

杉本辰夫さんへのお礼と共に、ご冥福を祈ります。

（会長 有田 裕一）

浜田昭平さん

浜田昭平会員の訃報に接したのは、9月27日の運営委員会の席上。

昨年夏に転んで足を痛めたと聞いていたが、6月例会には出席され「大分良くなりました」とのことでひと安心していた。9月11日夜に呼吸に変調をきたし翌朝、タクシーで市民病院へ行かれた。救急車を呼ばずタクシーには自力で乗り込まれたそうである。しかし病院に着くころには様子がおかしくなり、そのまま逝

かれてしまった。享年 84 歳であった。

浜田昭平さんが鶴沼を語る会に入られたのは 6 年前の 8 月。いろいろ会のことを聞きたいということで、藤沢の居酒屋にご一緒した。浜田さんは以前駅ビルに貴金属を扱う「優美堂」を出されていたということで、その裏手のビルの居酒屋は浜田さんのくつろぎの場所であったと思われた。会の例会にもよく出席され、いつも穏やかな笑顔を絶やさない方であった。

昨年夏に会誌 111 号一特集 戦後 70 年…終戦前後の記憶―に執筆をお願いしたが、当時のことを書くことはできない、と苦しげな表情を浮かべていられたのが忘れられない。終戦前、平塚の軍事工場に学徒勤労動員されていて、米機の機銃掃射で仲間が何人も目の前で亡くなった、とボソリと語った。その時点で執筆依頼は取り下げた。「まあ、そのうちに一杯やりながらなら話せるかな」という言葉を最後に、お話を聞くことはなかった。

まだまだ、教えていただくことがたくさんあったのに……。心よりご冥福をお祈りします。合掌。

(事務局 竹内 広弥)

山上英男さん

5 月 12 日に逝去された山上英男会員は 7 年前の 4 月に入会されたが、毎月の例会にはご自身の持つ講座《文学を読む会》と曜日が重なりなかなか出席できずにいた。しかし会誌『鶴沼』の製本作業には積極的に参加されていた。享年 78 歳。

鶴沼ゆかりの与謝野晶子、芥川龍之介、尼寺(本真寺)、村上春樹、徳富蘆花、岸田劉生、杉原千畝、長谷川路可などと鶴沼での出来事をたくみに織り交ぜたエッセー『くげぬま断章』を 9 回にわたり会誌に連載し、毎回、皆を楽しませてくれた。また祖父から受け継いだ藤沢町鶴沼の地図(昭和 5 年発行)を提供いただき、希望者に複製版を作った。

山上さんは鶴沼海岸で生まれ、商店街に面した祖父母の家で 6 歳から 5 年間の少年期を過ごした。教職の定年退職を機に再び鶴沼海岸に戻り、祖父母の地にビルを建て、そこを終の棲家とした。私はこの鶴沼海岸の山上さん宅の隣で少年期を過ごしていたので、当時の記憶に薄っすらと山上さんのことが残っている。

そんなことから新しくなった住居を数度訪ねたことがある。最上階からの眺めは素晴らしく、江ノ島、相模湾、丹沢山地、片瀬山と四方が見渡せる。ただ富士

山だけが横浜銀行の建物にさえぎられているのが、山上さんの嘆きのひとつであった。

最後に会誌に執筆されたのは昨年9月30日発行の第111号。題材は「鵜沼海岸・終戦日前後のこと」であった。この時期、体調を崩されていたようだが、何とか力を振り絞ってこの原稿を書かれたのだろう。

大学で日本近代文学を学んだ後、国語科教諭として教壇に立ち40年余り教育界に身を投じてきた山上さんは、文章を書くことに強いこだわりと意を持っていた。「海風の吹く小さな町からの通信です」とメッセージを添え作者、流木(RyuBqu)の名で『ざぶらん通信』を2003年より発信していた。

逝かれる10日余り前、最期となったと思われる5月1日の通信をみると、そこには山上英男さんの思いがあった。

五月の風に吹かれながら 流木

いのちは成り行きに任せるほかはないが、できることなら、はつ夏の、この5月の風に吹かれながら、こちらを旅立ちたいと思っている。

みどりの風は萌えでるいのちを彩りながら、雲になる気がする。

西行は「花の下にて春死なむ」と願って、それをかなえた。あやかりたい。

はつ夏の風にも身を置けくぐい鳥

くぐい（鵜）鳥＝昔この地に多く飛来したというハクチョウの古称で、鵜沼の地名はここからきているといわれている。

(事務局 竹内 広弥)

コーヒーブレイク *Coffee Break* コーヒーブレイク *Coffee Break* コーヒーブレイク

長い名前

朝日新聞に「吾輩は猫である」が連載中である。先日、苦沙彌先生が細君に一番長い語を知っているかと訊き、細君が「前関白太政大臣…でしょう」と答える場面があって、長い名前を思い出した。長いのでは「寿限無」が有名だが仮想人物だ。実在で名前の長い著名人では画家ピカソが筆頭であろう。案外知られてないと思うから、ここに紹介してみる。

パブロ・ディエゴ・ホセ・フランシスコ・デ・パウラ・ホアン・ネポムセノ・マリア・デ・ロス・レメディオス・クリスピン・クリスピアノ・デ・ラ・サンティスマ・トリニダード・ルイス・ピカソ という。(資料により若干違いがある)

スペインでは本名とクリスチャンネーム、両親、先祖も入れて名乗るから正式にはこうなるのだという。

高校生の頃、購読していた「美術手帳」に某美術評論家を書いていて、これは面白いと暗記したものだ。通常はパブロ・ピカソで通っている。(T.O)

戦後から東京オリンピック(1964年)のころまでの鶴沼のインフラ事情

8月例会で戦後の鶴沼の水まわり状況はどうであったかのか、参加者の間でフリートークした。話された事柄は以下の通り。

- ・鶴沼の南地区の多くの家には内風呂があった。
- ・植文は益田孝の庭番で東京から来た。その人が経営した銭湯がその後、天金になったところにあった。南の方はそこしか銭湯がなかった。
- ・中屋が作った松の湯が現在のMKビルの所にあった。田中かねさんが、なかなかの遣り手で建築の残材を使ってお湯を沸かしていた。
- ・当時は大家が店子(たなこ)に内風呂を使わせていた。
- ・銭湯には上がり湯があり、男湯女湯の仕切りの所に浴槽があって両方から使っていた。
- ・本鶴沼には中学校の近くのあだちクリーニングの所の前に銭湯があった。オリンピックの時にはなくなった。
- ・たちばな湯、というのがあった・・・
- ・ガスが普及して内風呂が増えた。

コーヒーブレイク *Coffee Break* コーヒーブレイク *Coffee Break* コーヒーブレイク

コーヒーブレイク *Coffee Break* コーヒーブレイク *Coffee Break* コーヒーブレイク

- ・ガスが普及し銭湯が衰退した。
- ・内風呂用に薪が売れた。燃料屋が商売になった。
- ・ガスはかなり早く入っていたが、風呂用の水は井戸（ガッチャン・ポンプ）
- ・クラブで水道の組合を作り、消火栓と水道を引いた。
- ・内藤家の周りでは土地を分けて水道も分けて入った金でガスを引いた。
- ・ガス工場は石上の保健所の所にあり、石炭から作っていた。
- ・ガス管は高瀬通りから広がっていったようだ。
- ・電気は昭和8年頃、従量制になった。それ以前は、電球（燭光制）を借りて点灯。
- ・内田さんのところ（藤ヶ谷）は50年に土地を購入したが、既に電気ガス、水道はあった。
- ・中屋のところの井戸は電気で汲み上げていたが、戦時中はポンプの鉄供出で、つるべになった。
- ・中屋の貸家はもともと私設の水道を設置していた。
- ・浅井戸は大震災で砂とか水が吹き出した。
- ・高木さんの隣には深い防災井戸がある。
- ・電動ポンプがあったから水道は不要で自給自足していた。
- ・下水は汚水も流せる本下水と生活排水のみのものの2種類がある。
- ・オリンピックで汚水も流せる下水が出来、それに合わせて辻堂の演習場返還で下水処理場が出来た。
- ・電気は昭和8年からひかれた。熊倉通りから広がったようだ。

例会の限られた時間のなか会員の皆さんの記憶を辿っての話なので、詳しく調べるには、いろいろ資料を読み返してみることが必要でしょう。

また9月の例会では“鶴沼でよく使われていた言葉”をテーマに、鶴沼の土地っ子が列挙した「鶴沼で使っていた言葉」をもとに、鶴沼特有の話し言葉についてフリートークしました。相当数の話し言葉がとり上げられましたが、長いこと鶴沼に住んでいても、聞いたことがない、そんな言葉が使われていたの、という方も多く、整理するにはまだまだ時間がかかりそうです。誌面の関係上、今回は紹介できませんでしたが、追って紹介して行きたいと思います。（佐藤 弘）

コーヒーブレイク *Coffee Break* コーヒーブレイク *Coffee Break* コーヒーブレイク

日向薬師・宝城坊本堂 平成の大修理

竹内 広弥(会員)

鶴沼から丹沢山塊を望むと、まず目に付くのはピラミダブルな姿の相州大山。別名、雨降山ともいわれ江戸時代から大山詣で賑わっていた山である。その大山の東に延びる尾根の末端近くに日向薬師・宝城坊本堂がある。



当山は奈良時代初頭の靈龜

葺き替えされた宝城坊本堂の茅葺屋根を見学

2(716)年に、僧行基により開山された。僧行基が熊野を旅していた際、薬師如来のお告げにより、相模国のこの地(現在の伊勢原市)に日向山 靈山寺(ひなたさんりょうぜんじ)を開山した、と伝えられている。本年度で開創 1300 年をむかえた。

安置されている「薬師如来像」や「阿弥陀如来像」などは平安末期から鎌倉時代に造られた。日向薬師は「日向修験」の寺として江戸時代以前から修験道の拠点であったといわれている。宝城坊本堂は単層茅葺屋根(かやぶきやね)でつくられた、間口 20m、高さ 10m、奥行 17mの荘厳な趣のある建物。

現在の宝城坊本堂は江戸期の万治 3(1660)年に旧本堂の部材を利用して修復され、半世紀後に一度、修理されているがその後、長いこと大規模な修理はされていない。約 300 年ぶりの大修理は万治 3年の時と同じ手法で 2010(平成 22)年 11 月から 7 年かけて行なわれ、今秋には終わるとのことであった。平成 18 年に詳しい調査が行なわれ、その結果、屋根・柱・床の老朽化と虫害により急ぎ大修理が必要なことが判明し、今回の「平成の大修理」を遂行することになった。

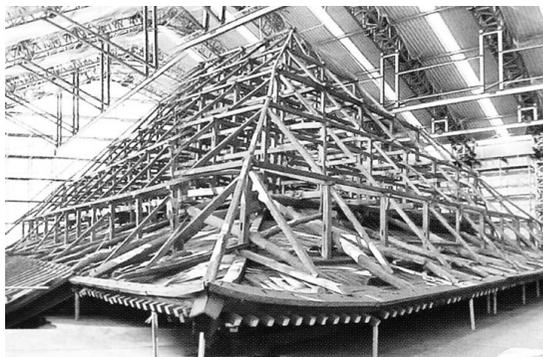


解体前の日向薬師・宝城坊本堂

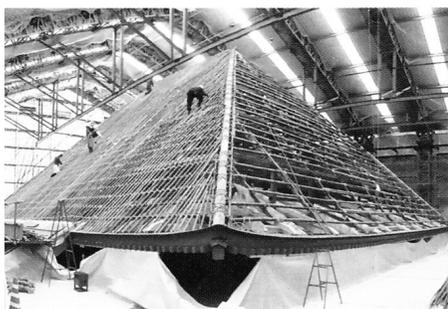
3月6日、茅葺屋根の葺き替えが終わった本堂の見学会が催され 200 名ほどが詰め掛けた。本堂軒先をぐるりと回る回廊が施され、45度の斜度の茅葺屋根を目の当たりにし、軒下のゾウ、トラ、リュウなどの彫刻も間近に見ることが出来た。



茅葺を取り除く ⇒



茅がなくなり木枠だけになった屋根 ⇒



新しい茅に葺き替える ⇒



斜度 45 度の重厚な美しい茅葺屋根に仕上げられた

日向薬師裏手の斜面はミツマタや梅の花が満開。峠を越えれば鶴沼の作家・今井達夫や尾崎士郎たちも遊んだ七沢温泉。十数年前に鶴沼を語る会でも史跡めぐりの一環として、この日向薬師を訪れている。



軒下のゾウ、リュウなどの彫刻も間近にみられた

＊

修理工事を見学した日から8ヵ月経った11月4日、完成間近の日向薬師を再訪。本堂の修理はほぼ完了、11月20日の落慶に向け周辺の仕上げが急ピッチに進められていた。すっかり秋の気配が深まり、周りの山々はうっすらと紅葉していた。

(たけうち ひろや)



大修理された日向薬師・宝城坊本堂

鶴沼を巡る千一話

海岸平野の砂丘列 (第 0001 話)

渡部 瞭

冬至の前後、陽が西に傾く頃、鶴沼の道を海に向かうと、正面からの陽光に眼が眩む思いをすることがよくある。

これは、鶴沼の道の多くが北東—南西方向に並行していることによる。どうい理由からそうなるかという、砂丘列の走行が北東—南西方向に平行だからである。



鶴沼地区の地形は、全体が「湘南砂丘地帯」と名付けられた海岸平野に位置する。海岸平野とは、砂質の浅い海底が陸化してできる平野をいう。

海岸平野を構成する物質は、沿岸流(海岸線に沿って流れる海流)によって運ばれてきた砂が、寄せ波によって渚にうち寄せられたものだ。渚には貝類が生息するので、しばしば貝殻を含む。藤沢市の海岸平野(湘南砂丘地帯の東半)の場合、砂の構成を調べてみると、丹沢山地の岩石とほぼ一致し、一部火山噴出物を含む。つまり相模川が運んで来て、海に吐き出した砂だ。また、引地川や境川の砂も若干含まれる。茅ヶ崎や辻堂海岸の渚には平たい円礫(えんれき)が見つかることが

あるが、鵠沼や片瀬の場合、海岸線にも内陸の砂地にも礫が含まれることは稀である。相模川の河口から離れているためだと説明できる。

海岸平野の地形の特色の第一は、一般に海岸線に平行する砂丘列が見られることである。

そもそも海岸平野における砂丘列が海岸線に平行する理由としては、次のように考えられている。

砂丘の形成 砂浜(さひん)海岸のうち寄せる波は、渚(なぎさ)で速度が速くなるためエネルギーを増し、渚の砂を侵食して陸上に運ぶ。押し上げられた砂は波のエネルギーが減退する高さに堆積して、海岸線に平行した細長い高まりをつくる。これを浜堤(ひんてい)(バーム)という。波が引くときにも、渚で速度が速くなるためエネルギーを増し、渚の砂を侵食して今度は海底に引き込む。引き込まれた砂は波のエネルギーが減退する深さに堆積して、海岸線に平行した細長い高まりをつくる。これを沿岸州(えんがんす)(バー)という。沿岸州は引き波だけでなく、沿岸流による運搬物も堆積させる。

波の強さは表面を吹く風の風力や風向によって常に変化するから、浜堤や沿岸州も日常的な波によるものと強い波によるものと2~3列が平行して形成されているのが普通である。沿岸州は海底にあるため観察しにくい、大潮の干潮時には海面に姿を現す場合がある。また、寄せる波を観察してみると、波頭が崩れる位置は渚から一定の距離であることがわかる。沿岸州で押し上げられて崩れるのだ。沿岸州がきれいに続いている場合、寄せ波のバランスと適合すると、波頭が一斉に崩れてパイプラインと呼ばれる見事な管状になるときがある。サーフィンとは、こうした寄せ波の性質をうまく利用したスポーツだ。

このような海岸線に平行した浜堤や沿岸州が、地盤の隆起あるいは海面の低下によって海岸平野になると、海岸砂丘列となる。通常海岸部では、気圧配置が安定しているときは昼間は海から陸に向かう風(海軟風)が吹き、夜間は陸から海に向かう風(陸軟風)が吹く。太陽エネルギーの強い昼間の海軟風の方がはるかに強く吹き付けることは、海岸部に生えている樹木が海から陸に向かって偏形していることでたやすく判断できる。湘南海岸にはクロマツやトベラなどの防風防砂林が植栽され、若木はよしずなどで護られている。この強い風の吹き寄せによって、陸化した浜堤や沿岸州が形成した海岸砂丘列は成長する。

本州の典型的な海岸平野としては、太平洋側の鹿島(かしま)、九十九里、遠州

など、日本海側の新潟平野などが知られている。これらに共通する特色として、海岸線が緩やかな弧状であること、海岸線に平行する砂丘列が見られることが挙げられる。湘南砂丘地帯の場合はどうかというと、現在の海岸線は緩やかな弧状をなしており、平塚市から茅ヶ崎市にかけては海岸に平行する砂丘列が認められる。ところが藤沢市の砂丘列は、最北部・中間部・最南部の3帯に分けられ、最北部と最南部は海岸線と平行する。しかし、中間部の砂丘列は、辻堂付近では東北東—西南西方向、鶴沼中央部では北東—南西方向、鶴沼東部では北北東—南南西方向、片瀬では南北方向と、東に行くに従って海岸線とは直交するような角度をもつに至る。そしていずれも北側が、標高が高い。

その理由としては、かつては卓越風の吹き寄せが論じられていたが、他の海岸平野では余り見られない現象なので、疑問視されていた。すなわち一旦海岸線に平行に形成された砂丘列が、卓越風による吹き寄せによって、北東—南西方向に偏向し、相模野台地や片瀬丘陵に近づくと風向が偏向し、北部では東西、東部では南北方向になるというものだ。この地方の卓越風とは冬季の季節風、いわゆる木枯らしで、北西風を〈ナレエ(慣い)〉、西風を〈ニシ〉と呼び慣わす。しかし、海軟風との相殺(そうさい)もあってか、とくに顕著な風とはいえない。砂丘上のクロマツの偏形もさほどとはいえない。また、冬季に成長するムギの新芽を飛砂から護るために、畑に麦わらを挿す光景は、湘南砂丘地帯の風物詩といった風情だったが、その方向も必ずしも一定していない。

近年の研究により、湘南砂丘地帯東部、すなわち藤沢市南部低地の形成が、各種土木工事時のボーリングコア、考古学的な遺物の分布など、多角的に論証され、明らかになってきた。

それらによると、湘南砂丘地帯の基盤には、表面の深度が北部で海拔 0m、海岸部で海拔-20m 程度の南に傾斜する第三紀層があり、その上に北に厚く南に薄い円礫の河成層が載っている。これは、洪積世(こうせきせい)前半の縄文海進以前に形成された扇状地と推定できる。そしてその表面に縄文海進期に沿岸流が運んできた相模川が吐き出す海砂が厚く堆積しているのである。

鶴沼における海岸砂丘列の方向は、道路網のみならず、鉄道、地割り、畝立て、家屋の向きなど、あらゆる地上物の方向に影響する。

おもしろいことに、鉄道では最も古い旧国鉄の東海道本線は、茅ヶ崎市、平塚市の市域では砂丘列の方向に影響されているといえるが、鶴沼を中心とする藤沢

市域では砂丘列を斜めに断ち割るような部分もあり、藤沢—茅ヶ崎駅間は東海道本線最長直線区間として、旧こだま型 151 系の試運転が行われたこともある。

次に古い江ノ電も、ほぼ砂丘列に平行するが、藤ヶ谷付近では「百両山」を削ったと思われる部分がある。

ところが、藤沢駅以南の小田急江ノ島線の路線は、大きく「く」の字なりになっている。これは砂丘列の方向に影響されている。新宿方面からの下り列車は藤沢駅でスイッチバックし、駅を出てすぐに約 45° 近く左にカーブして南西方向に向かって長い直線区間となる。この直線区間の中央部に本鵜沼駅がある。直線区間が終わると、R=? という急カーブで約 90° 左折し、鵜沼海岸駅に向かう。終点の片瀬江ノ島まではほぼ海岸線に平行するが直線ではなく多少のカーブが見られる。ここは北側に平行してやや高い海岸砂丘列があったものを削った部分である。

もう一つ興味を惹かれるのは、神社の社殿の向きである。日本では神社の社殿は南面して建てられる伝統があった。鵜沼の場合、この伝統は明治前半まではしっかり守られていたようで、奈良時代創建と伝えられる皇大神宮はもちろん、新田宮も南面して建てられている(新田宮の創建年代は調べがっていないが、おそらく明治 20 年代と思われる)。皇大神宮は、「昭和の大造営」でもこの伝統は引き継がれた。

これらに対し、明治末期の賀来神社は西に面して、昭和 18 年の伏見稻荷神社は東南東向きに建てられている。これら 2 社が創建された時期は、日本にとって国家神道が最も興隆した時期と重なり、ことに賀来神社の場合、境内の向きからいえば南面する方がむしろ自然と思われるにも拘わらずである。

(わたなべりょう)



『鵜沼を巡る千一話』は故人の渡部瞭さん(鵜沼を語る会副会長 当時)が、体調を崩した中で懸命に書き綴ったものです。千話を書き上げるべく作業を続けたが、残念ながら第 0332 話で終わりました。今回はその中から地理の専門家らしく、鵜沼の地形に焦点を当てた『海岸平野の砂丘列』(第 0001 話)を取り上げました。

プレイボーイ

(前篇)

今井 達夫

同じ海岸町の住人である田浦から電話で木部寅士の死去を知らせて来たのは晩秋のある夕方で、馬座は不意を喰った心持でしばらくは声がでなかった。これから通夜に行くという田浦に帰途にでも寄ってくれないかとたのむのがやっとであった。このところずっと外出できないからだの状態にある馬座で、そのことも云いそえたのである。

田浦は前日葬儀をすませたといって翌々日来訪してくれた。いろいろと馬座の質問に答えてくれた。木部の死因は心臓疾患で、大分前からやられていたらしいといった。

「ことしの正月から半年ほど入院していたそうです。」

「入院ね。じゃ、一応退院ということになったんだね。それで？」

「ところが、入院中にもわがままのいえる見舞客が来ると、酒を買って来いと駄駄をこねたそうです。もちろん医者から禁酒を命じられていたのです。」

「……………」

「退院してからも毎日飲んでいましたですから、御当人がどう考えていたのか、そばにいたひとにもわからなかったという話でした。」

「ちょっと。そばにどんなひとがいたのですか。」

「若い女のひとです。奥さんとは大分前から別居しておいでだったということです。僕などはあまり詳しいことは知らないんですが。」

「ウム。」

うなずいてから、馬座は質問をかさねた。

「—— その若い女のひととは、どういうひとですか。ずっと木部と一緒にいたのでしょうか。」

「ええ、ずっと一緒だったらしい様子でした。木部さんが前に病院につとめておいでだったのを御存知ですか。」

馬座がまたうなずくと、

「その病院で炊事の方をやっていた栄養士というんですか、そういうひとだった

らしいのです。随分年のちがう、木部さんは六十八か九でしたから、—— 最後までプレイボーイだったのですね、木部さんは。」

「プレイボーイか。」

馬座はふとつまずいた気持でつぶやいた。田浦はかるい気持で口にしたのだろうが、馬座にはもう少し重たい意味の解釈がうかんで来て、同意できなかったのである。

田浦が帰って行くと、馬座は波のように押しよせて来る長い歳月の思い出のなかにひたった。木部とのつきあいは、満三十年に及ぶ歴史を持っている。近年はたがいの環境の相違が逢うことを稀にしたが、昔の親しきは消えなかった。顔を見れば詩を書いていたころの木部にもどり、また文学青年だった馬座にももどつての親しさが蘇って来るふたりであった。

はじめて逢ったのは大正九年で、馬座が三田の学生になった秋のことである。そのころやはり現在住んでいる海岸町に家のあった馬座は、知合いになったとたん木部の詩人としての才能に傾倒した。二歳年長の木部は彼がいままでふれたことのない資質をかんじさせ、彼を魅了したといっても嘘ではなかった。毎日のように逢っても、木部の魅力は消えなかった。その上、木部は明治時代の文豪の遺児という輝かしい背景の持ち主であった。

木部も同じ海岸町の住人で、馬座の家からすこしはなれている農村地帯の農家のはなれに下宿していた。木部の方もそういう環境にあって友人を求めているからでもあろう、たびたび馬座を訪ねて来たものである。あとで知ったのだが、木部がとなり町の南湖院という療養所を出て、その海岸町に来たのは馬座の知り合うちょっと前だったことが、ふたりを結びつけるためには、いい機会だったといえよう。

しかし、農村地帯の木部の部屋をはじめて馬座が訪ねたのは、翌年の春の休暇にはいつてからであった。そのときの驚きを、馬座は五十年たった今でも新鮮に思い出すことができる。

その農家のはなれを訪問すると、木部はその座敷に寝ているひとを指して低い声でいった。

「このひと、僕の奥さん。今病気なんで、上ってもらえない。失敬するよ。」

木部の顔にも声にも、疲れの色があった。

知り合ったときからかんじていた先輩という印象を裏書きする情景で、そのため馬座は寝床に寝ているひとの方をほとんど見るができなかった。

次の日曜日遊びに来た木部は、その細君のことをかなり詳しく打ち明けた。かの女も茅ヶ崎の南湖院にはいつていた患者で、木部と知り合い恋愛におちた。家のひとたちの反対を押し切り、駆落ち同様に木部と結婚したのであった。しかし、木部とちがってかの女の方はずっと重症で、結婚生活のほとんどの日は病床にあったらしい。南湖院とは明治時代から有名な肺結核療養所であり、木部の父親の小説家もここで死去している。

その病妻は秋になると間もなく死んだ。木部の看病ぶりについては、海岸の氷を売る肉屋の小僧の話が馬座の胸を打った。

「木部さんは夜中に何度も氷を買いに来ましたよ。よっぽど惚れていたとみえるねえ。」

小僧の語気には同情の響きがこもっていた。肉屋の小僧から教えられて葬儀もすんだことを知った馬座は、そのひとにあのとき一度きり逢わなかった。いや、眠っているかと思った姿に一度きり接しなかったのを謝したい心持におそわれた。死ぬとわかっていれば、見舞いにも行くのだったと悔まれるたのである。

木部はその後間もなくその海岸町から姿を消した。しかし、まったく縁を切ったのではなかった。様子を見に行った馬座に、母屋の婆さんがこうゆう説明を与えたのである。

「木部さんは荷物を全部おいて行ったから、そのうち戻って来なさるでしょうよ。」

そして、その言葉通り、新しい年が来ると木部はまたその部屋に住みはじめ、馬座たちとのつきあいも復活したのである。

その夏は毎日海へ出て来て馬座たちと一緒に泳いだりしていたが、暑中休暇で彼の部屋へ泊りに来ていた妹が東京へ帰ると、彼はまたふらりと姿を消した。しかし、今度は誰も心配しなかった。木部の母親は東京にいたし、そこへたびたび行くことの知識を与えられていたばかりでなく、今度も道具類はみんなおきっぱなしだったからである。

半年ほどのち木部は銀幕の上に姿をあらわした。思いがけない対面をした馬座は、しかし、意外というよりもあいつらしいなと微笑を禁じ得なかった。これでは当分この海岸町にはもどって来ないだろうと思っていると、木部は馬座を訪ねて来て、撮影所はやめたといった。

「惜しいじゃないか。もうすこし辛抱すれば、いい役がついたろうに。」

「いや、役者なんて僕には向かないよ。やっぱりひとりで机に向かうのが、僕に

与えられた仕事だよ。」

彼の詩がたびたび有力な文芸雑誌の頁を占めたのは事実であった。が、この説明にはかくされた事情もあった。撮影所にいるあいだに若い女優と恋愛におちいって追放されたのである。

それを馬座が知ったのは、また夏が訪れたところで、木部がその女優との連絡をたのんだことから知ったのである。

「僕は今撮影所へ出入り禁止の状態なのでね、たのむよ。かの女になんとか連絡するよういってくれないか。」

「しかし、僕はかの女を知らないよ。僕が行っても、逢ってくれるかどうかなあ。」

「大丈夫だよ。かの女は君のことを知っているんだから。僕が何度も話したからね。」

選ばれたこと、そして彼の恋人が名前を知っているということが、馬座の胸をくすぐった。

そして、この依頼をうけるだけの親しさは、この依頼を引き受けたことでさらに倍加したとあっていいだろう。

馬座は盛夏の炎天下を蒲田の撮影所に木部の恋人を訪ね、逢うことができた。そして、かの女の伝言を木部に伝えた。

「そう。わかった。じゃ、横浜駅で待とう。ここまでやってくれたんだ。一緒に来てくれよ。たのむよ。」

大森の喫茶店で待っていた木部は、顔いろを明るくした。しばらくぶりで学校の制服を着た馬座は、早く海岸町へ帰って裸かになり海へとびこみたかった。が、木部の血走った目を見ると、突き放すに忍びなかった。

馬座は木部の希望通り、夜の横浜駅のプラットフォームでいくつかの急行列車を待ちうけた。木部の恋人は今夜の急行で大阪へ帰るが、東京駅には親戚のひとが見送りに来るから横浜駅で落ち合おうという伝言だったのである。しかし、最終の急行まで待ったけれども、列車ごとに車窓を見てまわったふたりの前にかの女の姿はなかった。

木部は悄然と打ちのめされた姿勢で、東京の母親のところへ行くと馬座と別れた。

「今日はありがとう。明日大阪へ行って来るよ。」

そういった木部の目は、思いつめた光をたたえていた。馬座は木部と別れると、急に不安におそわれた。木部の恋人が今夜の急行に乗るなどといったのは、その

場限りの逃口上ではなかったかという不安であった。すると、不安は次から次へと馬座を悩ませた。今夜大阪へ行くことを木部に連絡してなかったのはどういう理由からであろうか……。

木部から消息を知らせて来ないままに、五日たった。馬座は様子を見るために、木部の部屋を訪ねてみた。そのはなれの雨戸があいていて、部屋一杯に白い蚊帳が吊ってあった。声をかけると、睡眠不足の目を無理にあけた木部が蚊帳をくぐって縁側へ出て来た。

「やあ、君か。せんだってはどうもいろいろ。今朝大阪から帰って来たんだ。おい、馬座君が来てくれたよ。起きて挨拶しろよ。」

その言葉にうながされて蚊帳のなかで起きあがったのは、先日撮影所ではじめて逢った木部の恋人で、その笑顔と派手なゆかたの模様とは馬座の目に焼きついた。

午後海へ誘いに来た木部は道道あの夜以来のことを打ちあげた。かの女が大阪へ行ったのは翌朝の急行で、撮影所へかけた電話でそれを知り彼もその日のうちに大阪へ出発した。

「かの女の家を探すのに苦勞をしたぜ。それはともかく、今後一緒に住むことになったから、よろしく。」

「それはよかったね。」

そのときは多少羨望をかんじながら祝意を表した馬座だったが、日がたつにしたがって先日かんじた不安がしこりになって胸に残った。

木部とかの女との同棲生活は、すくなくともそのはなれの日日は長くつづかなかった。その年起った九月一日の関東大震災がこの海岸町にも大きな被害を与え、その結果として木部夫婦は須磨の親戚をたよってゆくことになったからである。もっとも逃げて行った須磨では一軒の家に住み、恋人は撮影所をやめての同棲生活だったから、むしろ一人前の所帯を持つ機会にめぐまれたというべきかも知れなかった。

地震の被害で家を失った馬座は大森に住むことになったが、翌年夏の休暇を利用して関西へ遊びに行き、その途中木部を訪ねひと晩泊ったりした。ひどくなつかがった木部は、あるいはそれがきっかけになったのか元の古巣の湘南の海岸町にもどって来た。大正十三年の晩秋であった。

そのころが木部夫婦の幸福な日日だったかもしれない。というのは、翌々年大正末年の夏には破綻におちいってしまったからである。そして、その破綻には、

意識することなしにだけれども、いくらか手助けをした思い出の残っている馬座であった。馬座自身直接関与したわけではないが、心情的には加害者意識を持たされた出来事がからんでいたのである。

大正十五年の夏、馬座は鎌倉稲村ヶ崎に部屋を借りて避暑をしたが、そこへ遊びに来た女性たちのうちのひとりと木部が駆落ちをするという出来事が起ったのである。その女性つまりその後数年間木部と結婚生活を共にした千瑛子という新劇女優の見習生仲間と三人で馬座の部屋へ泊りに来ていたのだが、となりの海岸町の木部の家へつれて行ったことからその出来事ははじまった。

その翌日、木部は東京に出る途中だといって寄ったが、そのときはたして彼の胸中に千瑛子の姿があったのかどうか、馬座は知らない。東京に行く途中と云いながらなかなか腰を上げない木部にふと首をかしげるくらいの気持であった。ところが、女連が夕食の支度をはじめても、木部は座りこんだままで竹田と馬座を相手にビールを飲みはじめ、東京に行くのは明日にすると云い出した。

「どうだろう、今夜ここに泊めてくれないか。うちへ帰りたくないだよ。」

千瑛子たちも一緒にビールを飲み出すと、木部は妙なことを云い出した。

「——馬座君、君にはいろいろ迷惑をかけたが、俺の女房をどう思う？ あいつは俺を裏切ってやがるんだ。いとこという奴と待合へは行って行くのを見た者がいるんだ。誰でもない、俺のおふくろなのさ、発見者は。女房は絶対にそんなことはないと云いはるんだが、そいつとの関係は俺以前からのことなんだ。」

ひどく悲痛な語気で、ほかの三人はもちろん馬座さえもすぐには応答ができなかった。

「まあ、その話は別の機会に聞くことにしようじゃないか。今夜はゆっくり飲もうよ。」

馬座が座の空気をとりなすようにビールを酌すると、木部はそれまでの悲痛な表情が嘘だったみたいに快活になった。

「ウン、そうだね。諸君、失敬しました。今の話はケンゴムで消して下さい。賑やかに飲みましょう。馬座君、コーラスもやろうよ。何にする？ サンタ・ルチヤ？ 知っているかたは一緒にどうぞ。」

木部がうたい出すと、顔いろを弛めた竹田とふたりの女性も合唱に加わった。

翌日竹田たちが帰るとき、木部も一緒に東京へ出たが、それっきり細君のところへ帰らなかったと馬座が知ったのは、一週間たって木部の細君の来訪をうけてからである。

「どこへ雲がくれしたんでしょう？ お心当りございません？」

細君は木部が馬座のところに寄ったことを知っていた。

「たしかに寄りましたがね。なんにもいっていませんでしたよ。」

それは事実だから、馬座も強い語気で云い切った。「—— XX社へ原稿届けるとはいつていましたが。」

「XX社へ電話をかけたら、稿料を渡したといっていました。」

「おふくろさんのところじゃないかしら。」

馬座は探りを入れてみた。すると、十分に反応があった。

「あのお母さまとは今おつきあいしていませんから。」

急に硬ばったかの女の顔いろが、あの晩、木部の言葉を裏書していると馬座は思った。かの女が帰って行ったあと、馬座は撮影所を訪ねた出来事を思い起こした。あの晩横浜駅で落ち合えなかったかの女は、次の日大阪へ行ったと木部は説明したが、東京駅で逢うことを拒んだかの女の理由が訝かしかった。親戚のひとりが見送りに来るからといったが、数日後には同棲生活にはいる立場にいる木部を敬遠した理由はなんだったろう。木部の母親の発見した浮気の相手がいとこというのは、何か話が合うではないか。

しかし、馬座はこの偶合をこれ以上追求するなど自分に命じた。あまりに事件ができ上りすぎていると思ったからである。そして、木部の失踪については前に経験もあったから、別に胸を痛めもしなかった。

ところが、彼のまったく知らない蔭で事態は意外な進展をして、馬座の世間知らずを嗤っていたのである。夏も終って学校がはじまり、竹田から聞いた木部の消息は、またしても木部の情熱のはげしさを教えたのであった。

「木部君はね、群馬県の田舎の温泉に千瑛子とかくれているよ。」

「千瑛子と？ ほんとか。」

「嘘をいったてはじまらないじゃないか。」

竹田は馬座の表情を見ながら「——木部君も千瑛子も君に隠しているのを申しわけないないと手紙に書いて来た。しかし、君に知らせると細君にも通じやしないかと恐れたのだね。細君が君のところへ訊きに行くとは察してのことさ。」

「そうかい。かの女はたしかに僕のところへ来たよ。しかし、木部の都合のわるいことをしゃべる僕かどうか、いや、君に文句をいうのは見当ちがいだね。それより、千瑛子の変り身のはやさには驚いたね。うちでビールを飲んだ晩、もうそうだったのかしら？」

「それはわからないがね。東京へ帰って三日目ぐらいのようだったね、群馬の山奥へふたりで行ったのは。」

「フム。ますます木部二世だね。」

馬座はそういったが、胸中すこし面白くなかった。

だが、木部が馬座を仲間はずれにするつもりではなかったことは、その年末馬座の家のある大森で千瑛子との同棲をはじめた事実が証明した。

「竹田君から聞いたが、君にはすまないことをしたよ。あいつは妙にカンのいい女だから、君の気はいから察しをつける危険があると考えたんだ。君だって知っていて知らん振りをするのは厭だろうと思ってさ。」

木部の弁解は馬座の気持をやわらげた。そうでなくとも、近所づきあいのはじまったことは、震災前の友情を復活させたのである。毎日のように往来する近所づきあいは、海岸町時代よりも深かったかも知れない。

しかし、その状態は長くはつづかなかった。昭和にはいっていわゆる円本時代が来ると、その影響がふたりを引きはなすことになった。

木部の亡父が明治時代の文豪だったことはすでに説明したが、そのひとの印税が木部のふところどころがりこみ、木部は大森の小さな借家生活から母親や妹のいる小石川に大きな家を借りて越して行ったのである。まったくそれは思いがけない変化を生活の上にもたらしたというべきで、馬座は遠くから木部の変化を見守るばかりの期間であった。

こんなことがあった。軽井沢へ避暑に行っている木部夫婦から誘いの手紙が届いたとき、馬座は丁寧に断わりの返事を書いた。誘いというより招待の意味を多分に含めたその手紙には、がまんのできない成金的臭気が立ちこめていたからである。馬座は自分がひがんでいるのではないがとくりかえし反省してみたが、幾日かかかって書いた返事が断わりの手紙になったのである。震災の影響が亡父の遺産に痛手を与え、目をつぶっていたその痛手が次第に明らかになって来つつある時期であった。稲村ヶ崎で世話になった礼の気持もこめて、と書いてあった木部の手紙の一行が、馬座の胸を閉ざしてしまったのだ。

丁寧に書いた手紙だったが、木部のするどい神経は裏にかくした馬座の胸中を読みとったのかも知れない。その後しばらくのあいだなんのたよりもなく、ひとを通じて聞えて来る木部夫婦の消息は、馬座の反撥をそそる生活状態であった。だから、もし生涯の交友にひびがはいるとしたら、それはこの時期にあったろう。が、両方でそんな話にふれることなく過ごしたのは、幸運な経過というべきであ

った。いや、賢明な態度だったと云い直してもいい。

木部がまた大森の馬座の家に姿をあらわしたのは、二年ほどあいだをおいた夏の日であった。

「やあ、元気かい？」

木部の彫りの深い顔を久しぶりで見た馬座は、その張りのある声もなつかしく、思わず玄関で頬の線を弛めてしまった。

「ウン、相変らずだよ。君の方はどうだい？」

「僕の方は、いろいろというより仕様がな状態さ。」

木部はやや羞かんだ気はいを見せた。馬座の好きな木部の表情のひとつであった。馬座は微笑を返した。

「それァいろいろあったろうね。」

「皮肉かい。カンニンしてくれよ。」

それだけで通じるものが、ふたりのあいだには残っていた。

「ところで、この暑い最中に何か用があったのかい？」

「いや、東京へ出た帰りなんだ。ふっと君の顔が見たくなってね。」

東京の帰りという言葉を訝かしくかんじて顔を見直すと、木部は敏感な反応を示して打ちあけた。

「—— 今、横浜にいるんだよ。下宿生活さ。千瑛子も一緒だが、これから遊びに来ないか。」

夫婦で下宿生活と聞いて興味をそそられた馬座はその誘いに応じた。

本牧の海に近いその下宿屋は、馬座の期待を裏切って古びた粗末な建物であった。木部夫婦の部屋は八畳間だが家具類などまるでないからがらんと、かえってみすぼらしい印象を与えた。千瑛子は化粧もしない顔で出迎えたが、木部のうしろからあらわれた馬座を見ると大げさに目をみはってみせた。

「あら、馬座さん、これはどうしたてエの？ あらあら、どうしましょう？」

アップパだけのかの女は大いそぎでひとえものを着た。

「今さら気取ったって仕様がなよ。馬座君、ごらんの通りの世話場さ。口で説明したってわかってもらえそうもないから、現場をお目につけたんだがね。使い果たして、二分狂言という始末さ。」

自嘲的な言葉には、しかし、おどけてみせる余裕が残っていた。これはいつぞやの馬座の返事の手紙に対する答だったとあっていいだろう、と馬座はうけとった。

そして、馬座と木部との交友は復活した。以前と同様大森の家へもたびたび遊びに来るようになり、馬座の母親や妹と湘南の海岸町でおそわれた大震災について話し合ったりした。馬座の方では木部の母親に逢ったことがないのに反して、木部は震災前から彼の家へ遊びに来ると母親や妹たちと話したりする親しさを見せていたのである。

木部が小石川に引越したと知ったのは、一年ほどのちで、そのころはさらに窮乏の度を加えていたらしい。誘われてその家を訪ねた馬座は、二部屋の家が一戸建てであるにもかかわらず、家具類などまったくないありさまで千瑛子がバアで働いていると聞いた。それで毎日の暮らしを立てているとは、かの女にとって夢想もしなかった生活の変化であったろう。

「芝居の方はどうしているの？」

その家に行ったとき訊いてみたが、かの女は小さく笑って頭を振った。

「とてとても。そんな余裕まるでないわ。」

千瑛子は寂しさをかくしているとも見えなかった。机に向っている形跡もない木部が現在どんな考えを持っているのか、痛いところにさわるのを遠慮した馬座は、彼の才能を信じているひとりとして、千瑛子を仲間とみとめた。

しかし、そのころ木部はひとりで考えていた時期であったらしい。こんなことを云い出して、馬座を驚かせたことがあった。

「あの連中に一度逢ってみる気はないか。それァ幼稚といえそれまでだがね。しかし、本気で考えていることだけは信じていいよ。一度チャンスをつくるから、そのときは出て来いよ、ね。」

木部は熱心な語気ですすめたが、ついにその機会なく終った。あの連中とは、世間でいう青年将校たちのことであった。五・一五事件のころであり、馬座も無関心ではなかったが、すすめられればとにかくこちらから積極的にはなれない懐疑的などころのある馬座であった。

竹田は馬座が幾度か落第し結局、中途退学した学校を出ると同時に新聞社にはいった。その祝いを個人的にした日、竹田は酔ってそれまでだまっていた木部と千瑛子の恋愛について、千瑛子から聞いた話を打ちあげた。

「稲村ヶ崎の君の部屋に木部君が泊った晩には、千瑛子は強引に接吻されると白状したぜ。君には黙っていてくれといったから、今まで秘密にしておいたんだ。」

「そうかい。木部らしい話だな。」

馬座は竹田と一緒に笑ってすませたが、自分だけの知らないそんな事実があっ

たのかと、おもしろくない気分をかんじないわけではなかった。軽井沢からの誘いの来る直前だったから、断わる気持のなかにはその話の影響がなかったとはいえない。

竹田はその新聞社の大阪本社へ行き、その大阪在勤中のことである。馬座はいつもにない長い手紙を受けとった。

—— 僕がここにつとめているのを知ったので訪ねて来たというのだが、現在かの女が名乗っているのは、蒲田時代の芸名だそうだ。しかし、そんな知識のない僕は、つい近所の劇場で芝居をやっている明石幸江が木部の前の細君とは知るべくもなかった。訪ねて来た用件はその係の方へまわしたからこまかな結果はわからないが、その後礼を云いに来たところを見ると、どうやらお役にたつたらしい。それがきっかけになってつきあいはじめたのだが、木部の細君だった時代の話のいろいろ聞いた。木部君のいった浮気事件についてはそれとなく真相を訊いてみたが、力をこめて否定していた。もちろん、そのまま鵜呑みにはできない事柄だから、いずれもっと突っ込んで真相を聞き出してやろうと思っている。うまく話を聞き出せたら、また報告の手紙を書こう

大体そんな意味の内容で、かの女が舞台に立っていると知って、馬座はほっとした気持になった。かの女が木部を裏切ったかどうかを別問題にすれば、悪意をかんじていない馬座であり、むしろ、千瑛子を木部に引き合わせたことで幸江に対してすまなさもかんじたくらいであった。

しかし、竹田からの次の便りはなかった。いや、明石幸江に関しての便りはそれ一度だけであった。馬座は木部に竹田の手紙を見せなかった。前の細君の幸江が今さらどういおうと、離婚はすでに過去の出来事になってしまったのだ、と馬座としては割り切らないわけに行かなかったのである。そして、木部は千瑛子と一緒にになり、亡父の印税も使いはたした現在としては、幸江の存在にはふれたくないであろうと思いやる立場を馬座はとったのであった。

(いまい たつお)

以降、後篇につづく

「鵠沼を語る会」活動の記録

(平成28年4月～11月)

平成28年4月例会 4月12日(火) 10時～12時 20名出席

司会進行 守谷会員

- 会誌112号：出席者に席上配付し、欠席者には別途配付。
- 公民館まつり：展示内容、史跡めぐりの場所など今年度の計画について、意見交換を行なった。展示内容の候補として本真尼の活動が挙げられ、併せて準備作業スケジュールが提示された。会期は10月15日～16日。

『お話』—鵠沼郷土資料展示室で開催中の「日本画と西洋画の調和～鵠沼が誇る世界的画家の軌跡『長谷川路可展』」を、内藤会員の解説付きで見学。

4月運営委員会 4月26日(火) 10時～12時 9名出席

第30回総会・5月例会 5月10日(火) 10時～12時 19名出席

司会進行 中島会員

総会

有田会長、田淵鵠沼市民センター長(鵠沼公民館長)の挨拶の後、有田会長が議長となり総会議案書の審議を行なった。平成27年度事業報告、収支決算報告、今年度の事業計画案・予算案が提示され、全会一致で承認された。

今年度事業計画

- 1) 公民館まつりの出展
- 2) 史跡めぐり
- 3) 既存会誌および蓄積された資料の有効利用

5月例会

史跡めぐりについて会員から提案してもらい論議した。本真寺見学は近日中に実施することで、日程調整をすることになった。

5月運営委員会 5月28日(火) 10時～12時 10名出席

6月例会 6月14日(火) 10時～12時 17名出席

司会進行 佐藤弘会員

— 史跡めぐり・本真寺見学：6月21日実施、概要説明がされ参加者を募った。

— 事業計画：既存資料整理の手順について説明があった。

本真寺(通称・尼寺)見学 6月21日 10時～ 14名参加

6月運営委員会 6月28日(火) 10時～12時 8名出席

7月例会 7月12日(火) 10時～12時 16名出席

司会進行 竹内会員

— 史跡めぐり：6月21日に実施された本真寺見学の報告と感想が述べられた。

— 既存資料の整理：2回行なわれた資料整理の途中状況が報告された。

— 会誌113号：投稿原稿がまだ少ないので、改めて原稿募集がされた。

— 公民館まつり：展示テーマ案が発表され、プロジェクトチームとして作業を進めることになり、チーム員を決めた。

『お話』—「鶴沼のインフラ事情」をテーマにどのように発展してきたか、将来的に記録として残すことを目的に、会員が見聞したことを披露してもらった。

7月運営委員会 7月26日(火) 10時～12時 9名出席

8月例会 8月9日(火) 10時～12時 15名出席

司会進行 中島会員

— 公民館まつり；展示構想が説明された。

— 会誌113号：公民館まつりの準備日程と重なること、展示の様子などを会誌に掲載したいなどがあり、2ヶ月延期し11月末発行とすることになった。

『お話』—「鶴沼のインフラ事情」の水まわりをテーマに、どのように発展してきたか、フリートークした。

8月運営委員会 8月30日(火) 10時～12時 8名出席

9月例会 9月13日(火) 10時～12時 11名出席

司会進行 佐藤弘会員

- 公民館まつり：展示準備の作業状況が報告された。
 - 会誌113号：予定原稿が紹介され、さらに投稿を呼びかけた。
- 『お話』—「鵜沼でよく使われていた言葉」をテーマに話し合い記録に残した。

9月運営委員会 9月30日(火) 10時～12時 8名出席

10月例会 10月4日(火) 10時～12時 16名出席

司会進行 竹内会員

- 会誌113号：原稿の集まり状況が紹介された。更なる投稿を呼びかけた。
- 公民館まつり：ほぼ完成した展示内容の写真が提示され、作業、当日の当番、設営等の協力者を募り、決定した。来場者向けに展示内容パンフを用意する。
- 資料整理：高木ふれあい荘保管の資料整理で廃棄するものと残すものとの仕分け作業が完了したとの報告があった。整理期間は6月～9月、回数は6回。

10月運営委員会 10月25日(火) 10時～12時 7名出席

11月例会 11月8日(火) 10時～12時 18名出席

司会進行 佐藤弘会員

- 公民館まつり：準備作業、開催日での事柄が報告された。
 - 会誌113号：掲載原稿の内容が紹介され、印刷、製本作業の協力者を募った。
 - 新年会：アコレード閉店に伴い、新たな実施場所(店)について話し合った。
 - 史跡めぐり：県立近代文学館での「安岡章太郎展」の見学希望者を募った。
- 『お話』—鵜沼郷土資料展示室にて展示中の「鵜沼・残したい記憶と記録 古地図探索・今は無きおもかげ」を内藤会員の解説付きで見学した。

「安岡章太郎展」見学 11月15日(火) 学芸委員の説明付きで見学 4名参加

11月運営委員会 11月29日(火) 10時～12時 8名出席

在籍会員数：49名

(書記 佐藤 弘)

編集後記

- 11月24日、最後の校正をしていると明け方から雪になり、薄っすらと雪化粧。鵜沼で11月に雪が舞い、積もった記憶は自分にはない。都心でも雪となり11月の降雪は54年振り、積雪については記録が残る1961年以降、初めてのことだという。翌朝、すっかり晴れ渡り麓まで雪化粧した箱根、富士山、丹沢の山々がくっきり見える。まるで真冬の様相だ。今年は富士山の初冠雪が例年よりだいぶ遅れ10月25日、それから一ヵ月後の珍事。近年、季節の移り変わりは急激で、以前のように知らず知らずのうちに移行する情緒が薄れてきたように思える。(弥)
- お待たせしました。会誌113号をお届けします。3月末、9月末と年2回の定期発行を心がけていますが、若干のズレもあります。今回は2ヶ月遅れとなりました。会誌は会の顔、会の財産です。多くの方が楽しみにしているので、今後も出来るだけ定期的に発行して行きたいと思います。そのためには、皆さまからの早めの投稿が必要です。(有田)
- 公民館まつりの展示「日本のマザー・テレサは鵜沼にいた！」は、公民館まつりプロジェクトとしてスタート。展示は概ね好評であったようで、ほっと胸をなでおろしている。が、今回のような一会員の研究をプロジェクトとして扱うのは非常にむずかしいことを実感した。メンバー全員が内容を理解し、どんな展示にするかを決定し、展示物を作成するには日程的に無理があつて、殆ど独断専行になってしまった。メンバーの方々も、参加した実感が得られなかったのではないかと危惧している。反省点の多いプロジェクトの在り方であったと思う。(岡田)
- 「続・颯田本真尼と本真寺」は、岡田会員の現地取材と丹念な調査から得た事柄を優先した、既存の書物では知りえなかった内容のもの。10月の公民館まつりでも同じ事柄を展示し、地元鵜沼での周知を図ったことは意義あることだと思う。「鵜沼海岸のサーフィンの歩み」は、内藤会員の鵜沼の思い出として書かれたものだが、日本でのサーフィンの始まりとその普及を知る上で貴重な書き物といえる。1960年代の鵜沼海岸での若者たちの様子が、懐かしく思い出される。(H)
- 本真寺見学、雨のお寺は素敵でした。感動のままに初めて本冊子に訪問記を書きましたが、本真尼さんは自分の名前を表に出すことを特に好まれず、わずかな記録に残るもののほかは、ほとんど人に知られていなかったそうです。外見は小柄で華奢ですが、その内面は強い信仰心と深い愛に満ち溢れているのです。本真尼さんの災害支援活動はもっと多くの人に知ってほしいと思ったことでした。(原)

『鵜沼』 第 113 号
平成 28 年 11 月 30 日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵜沼を語る会
藤沢市鵜沼海岸 2-10-34
鵜沼公民館内
電話 0466-33-2002

URL <http://kugenuma.sakura.ne.jp/>